

塩崎遺跡群 V 殿屋敷遺跡

—— 角間地区市道路改良事業地点 ——

1987.8

長野市教育委員会
長野市道跡調査会

序

きれいな空気とさわやかな緑あふれる山々に囲まれた長野市は、上信越高原国立公園の飯綱・戸隠などの北信五岳を背景に善光寺平（盆地）が繰り広げられております。

また、市内中央には、千曲川・犀川の二大河川の清流が淀みなく流れ市民生活を遠古以来支えてきてくれました。

この善光寺平は、国宝善光寺を始め、松代藩真田10万石や川中島古戦場等の史跡、茶臼山動植物園・恐竜公園等数多くの観光資源にも恵まれ四季を通じて親しまれております。

このような恵まれた自然環境のなかで住み続けてきた我々の祖先が営々と築き上げてきた幾多の埋蔵文化財を始めとする文化遺産が残されています。

このたび、地方改善施設整備事業の一環として篠ノ井角間地区道路改良事業に伴う市道拡幅工事が実施する運びとなりました。

もとよりこの地一帯は塩崎遺跡群の北側に位置し、過去の調査でも周辺地域から著名な遺跡が発見されております。現代に生きる私どもは残された文化遺産を誇りをもって保護・保存に努め、更に後世に伝えていかなければならない立場から、この地に眠る埋蔵文化財の発掘調査を事業者工以前に実施することにいたしました。

発掘調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構・遺物が発見されました。その内容につきましては本書へ詳細に記載してあります。本書が埋蔵文化財にたいし一層のご理解と地域の文化の向上に役立ていただければ大変幸甚に存じます。

終わりに、発掘調査にあたり地元の皆様方のご協力を始め、報告書作成に至るまでの間、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことに対して心から感謝申し上げます。

昭和62年8月

長野市教育委員会教育長

長野市道跡調査会長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は、長野市と長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会との契約にもとづいて、長野市遺跡調査会が組織する遺跡調査団によって実施された地方改善施設整備事業(角間地区道路改良事業)地内における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 3 遺構図は、遣り方水系配線により1/20の縮尺で基本図をとり、1/60の縮尺を基本にして、詳細を要するものは1/30で図示した。遺物については1/3で図示し、貨幣は1/2である。尚、遺構断面図に標高値を記した。
- 4 遺物実測図中、断面をつぶしてあるものは須恵器、白抜きのは土師器(一部灰釉陶器)を表現する。
- 5 本文中の調査日誌・遺構図に遺構略号を使用した。SBは住居址、SEは井戸址、SDは溝址、SKは土壌の意味である。
- 6 調査にかかわる資料は、当面長野市埋蔵文化財センターで保管するが、最終的には長野市立博物館で保管する。

目 次

序	
例 言	
目次等	
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
1 分布調査	1
2 本調査	2
第2節 調査日誌	3
第3節 調査会・調査団の編成	6
1 長野市遺跡調査会規約	6
2 長野市遺跡調査会の組織	7
3 調査団の編成	8
第2章 調査地周辺の環境	9
第3章 調査	12
第1節 遺構の分布状態	12
第2節 縄文時代の遺物	14
第3節 弥生時代の遺構と遺物	17
第4節 奈良時代の遺構と遺物	24
第5節 平安時代の遺構と遺物	37
第6節 中世以降の遺構と遺物	69
第7節 時期不明の遺構と遺物	84
第4章 結 語	89

挿図・写真目次

I-1	調査地及び試掘坑	1
I-2	I区の調査(土壌・井戸址の検出)	3
I-3	II区の調査(溝址の検出)	4
I-4	III区の調査(住居址の検出)	5
I-5	III区の調査(土壌の検出)	6
II-1	塩崎遺跡群遠景(西より)	9
II-2	塩崎遺跡群と旧地点遺跡	10
II-3	調査地近景(北より)	11
III-1	I区の遺構	12
III-2	II区の遺構	12
III-3	調査地内の遺構分布図(1)	13
III-4	調査地内の遺構分布図(2)	15・16
III-5	III区西側の遺構	14
III-6	縄文時代土器拓影	14
III-7	1号住居址、1号土壌、1号井戸址	17
III-8	1号住居址実測図	18
III-9	1号住居址炉	19
III-10	1号住居址出土土器実測図	19
III-11	1号住居址出土土器拓影	20
III-12	16号住居址実測図	22
III-13	16号住居址出土土器拓影	22
III-14	遺構外出土土器拓影	23
III-15	4号～6号住居址	24
III-16	5号住居址、8号・18号井戸址実測図	25
III-17	5号住居址出土土器実測図	25
III-18	8号住居址出土土器実測図	26
III-19	8号・9号住居址、22号土壌	26
III-20	7号～9号住居址、21号・22号土壌、9号井戸址実測図	27
III-21	9号住居址出土土器実測図	28
III-22	11号住居址	28

III-23	11号住居址実測図	29
III-24	11号住居址出土土器実測図	30
III-25	14号・15号住居址、12号井戸址、ピット群	31
III-26	14号・23号住居址、25号土壌実測図	32
III-27	14号住居址出土土器実測図	33
III-28	3号溝址出土土器実測図	33
III-29	3号溝址	34
III-30	3号溝址断面	34
III-31	3号～5号溝址実測図	35
III-32	5号溝址	36
III-33	5号溝址出土土器実測図	37
III-34	2号住居址、1号溝址、6号井戸址、12号土壌実測図	38
III-35	2号住居址、1号溝址、12号土壌、6号井戸址	39
III-36	2号住居址出土遺物実測図	39
III-37	3号住居址、2号溝址、7号井戸址	40
III-38	3号住居址出土土器実測図	40
III-39	4号・5号住居址、6号溝址	41
III-40	4号住居址実測図	41
III-41	4号住居址出土土器実測図	42
III-42	6号住居址	42
III-43	6号住居址実測図	43
III-44	6号住居址出土土器実測図	44
III-45	7号～9号住居址、21号土壌、9号井戸址	45
III-46	7号住居址出土土器実測図	46
III-47	10号住居址	46
III-48	10号住居址実測図	47
III-49	10号住居址出土土器実測図(1)	47
III-50	10号住居址出土土器実測図(2)	48
III-51	12号住居址実測図	49
III-52	12号住居址、23号・24号土壌	50
III-53	12号・13号住居址、23号・24号土壌、10号井戸址、ピット群	50
III-54	13号住居址、23号、24号土壌、10号井戸址実測図	51
III-55	15号住居址、12号井戸址実測図	52

III-56	17号住居址实测图	52
III-57	17号住居址出土土器实测图	53
III-58	19号住居址出土土器实测图	54
III-59	19号·21号住居址实测图	55
III-60	19号·21号住居址	55
III-61	19号·21号住居址	56
III-62	20号住居址、13号井戸址实测图	56
III-63	20号住居址、13号井戸址	57
III-64	21号住居址出土土器实测图	58
III-65	22号住居址实测图	58
III-66	4号溝址	59
III-67	6号溝址实测图	60
III-68	7号溝址、26号·27号土塙实测图	60
III-69	1号土塙出土土器实测图	60
III-70	1号土塙	61
III-71	3号·4号土塙、2号井戸址	62
III-72	I区土塙·井戸址群	62
III-73	平安時代土塙实测图	63
III-74	16号土塙·出土土製品实测图	63
III-75	II区土塙群(北より)	64
III-76	II区土塙群(南より)	64
III-77	20号土塙	65
III-78	20号土塙实测图	65
III-79	20号土塙出土四耳壺实测图	66
III-80	20号土塙出土土器实测图	67
III-81	検出面出土土器实测图	68
III-82	2号溝址	69
III-83	3号住居址、2号溝址实测图	70
III-84	2号溝址出土土器实测图(1)	71
III-85	2号溝址出土土器实测图(2)	72
III-86	2号溝址出土土器实测图(3)	73
III-87	8号溝址、33号土塙实测图	74
III-88	31号·32号土塙、16号·17号井戸址	75

III-89	31号・32号土壌、16号・17号井戸址、8号溝址	75
III-90	31号・32号土壌、16号・17号井戸址実測図	76
III-91	31号土壌出土土器実測図	76
III-92	32号土壌出土内耳土器実測図	76
III-93	2号井戸址・出土土器実測図	77
III-94	中世の土壌・井戸址実測図	78
III-95	4号井戸址・出土土器実測図	78
III-96	6号井戸址出土土器実測図	79
III-97	13号井戸址出土内耳土器実測図	80
III-98	15号井戸址・出土内耳土器実測図	81
III-99	8号・18号井戸址	82
III-100	遺構外出土内耳土器実測図	83
III-101	遺構外出土の寛永通宝拓影	83
III-102	時期不明の土壌実測図	84
III-103	鉄製品・石製品実測図	87

図版目次

図版 1	1号・3号・11号住居址出土土器
図版 2	6号・9号・17号住居址出土土器
図版 3	10号住居址出土土器
図版 4	19号住居址、20号土壌出土土器
図版 5	検出面出土土器・鉄鏝、16号土壌出土土製品
図版 6	2号溝址出土内耳土器
図版 7	2号溝址出土土器、検出面等出土石器
図版 8	検出面等出土石臼

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 分布調査(試掘)

昭和61年5月2日付で、長野市福祉部から教育委員会に「角間地区道路改良工事にともなう発掘調査について」の照会があった。この時点で示された事業概要は、延長236m、幅5m(側溝含む)で、単純計算するに1180㎡に及ぶものであった。教育委員会社会教育課では、調査機能を有する博物館に調査を委任し、事業地内を調査したところ地形から塩崎遺跡群の範囲内に含まれるものと思料された。ただ遺物が表面採集できなかつた点と、浄信寺川寄りに幾分凹地化する微地形



1-1 調査地及び試掘坑

からの変換点が確認されるため、遺構の密集度及び範囲確認のため分布調査を必要とする旨回答した。その後用地交渉等諸々の事情で事業者工予定が遅れ、東西に延びる幹線の分布調査が実施されたのは昭和61年11月26日のことである。この結果を「長野市篠ノ井塩崎角間地区道路改良工事事業用地内埋蔵文化財確認調査概要書」として長野市福祉部に提出した。その概要は以下のとおりである。

- 1 調査地 長野市篠ノ井塩崎角間
- 2 調査の目的 角間地区道路改良工事に先立ち、事業用地内を試掘し、埋蔵文化財の有無などを調査し、その保護対策に備える。
- 3 調査年月日 昭和61年11月26日
- 4 調査方法 事業予定地内の任意の地点に試掘坑を設置し、バックホーを用いて掘削し、坑内断面にお

いて土層を観察することにより、遺物の包含状況及び遺構の存在の有無を確認する。遺物・遺構等の存在が明確になった場合には、記録保存等の保護措置に備えるため掘削を最小限にとどめる。

5 調査結果 試掘坑はA～C地点の3ヶ所に設定した(I-1)。そのうちA地点ならびにB地点においては住居址と思われる遺構が、またすべての地点において遺物包含層が確認された。A地点においては、56cmにわたる表土及び攪乱層の下にIII～VII層の未攪乱層が検出される。このうち遺物包含層として把握し得るのは、IV～VIの3層で、須恵器・土師器等の破片が出土している。特にIV層は、焼土をともなう落ち込みが確認され、明確にはし得ぬが住居址の可能性も考えられる。最下層のVII層は、遺物の出土量は少ないが、床面も検出され住居址であることは明確である。

B地点においては、20cmにわたる表土下にII～IV層の未攪乱層が検出された。いずれの層からも土師器・須恵器の破片が出土し、遺物包含層としての把握し得る。

C地点においては、34cmの表土下にII～V層の未攪乱層が検出された。III～IV層からは、土師器の破片が出土し、床面も検出されたことにより住居址であることは明確である。(土層柱状図略)

6 所見 試掘調査の結果、事業予定地内はかなり広範囲にわたり住居址等の遺構ならびに遺物包含層が存在することが明確である。時代等の詳細は特定できぬまでも集落遺跡の存在が想定され、施工に先立って発掘調査を実施し、記録保存する必要がある。

ただこの調査で南北2本の支線部分を実施しなかったため範囲確認まで至っていない。ともあれ所見から全面遺跡と推定し、5月段階で提出した計画書・予算書を変更しなかった。即ち、事業面積1,180㎡中1,000㎡以上を発掘調査し、発掘調査作業28日、調査に要する費用6,000千円を計上した。

2 本調査

分布調査の結果に基づいて発掘調査の態勢を考慮しながら待機していたのであるが、担当部課における調整が思いのほか困難を極め、道路改良本工事は昭和62年度にわたるものとなった。それ故、発掘調査の依頼があったのは3月に入ってからである。この間に事業面積の変更があり、調査期間25日に、費用も5,000千円に減少した。委託契約書締結日は、昭和62年3月20日である。ところが、今度は教育委員会の機構改革が具体化し、4月1日から長野市埋蔵文化財センターが新たに設置され、それに伴う人事移動という発掘調査受託者側からの問題が浮上して来た。そのため本調査の実施にあたっては、新年度、新体制によって行われるべきものと判断し、4月以降開始することにした。

4月1日 長野市埋蔵文化財センターの新設。長野市遺跡調査会等の業務を引継ぐ。長野市遺跡調査会へは、長野市埋蔵文化財センター職員の出向というかたちになり、事務局もセンターへ移管する。

尚、工事の工程上、東側の南北支線をⅠ区、西側の同支線をⅡ区、東西の幹線をⅢ区と呼称して調査を進める。

第2節 調査日誌

4月20日（晴） Ⅰ区の表土除去作業を開始する。

4月21日（晴） Ⅰ区の表土除去完了し、Ⅱ区の表土除去作業にかかる。発掘調査機器材を搬入する。浄信寺川添いに遺構は見られない。

4月22日（晴・曇） 本日より作業員の協力のもとに発掘調査にかかる。天幕を設置し基地とする。Ⅰ区の残土処理をしながら遺構確認作業を進める。Ⅱ区表土除去作業を行う。

4月23日（曇） Ⅰ区の遺構をほぼ確認し、検出にかかる。この地区における土塀・井戸址群の調査をほぼ完了する。土塀12基・井戸址6基を確認した。

4月24日（晴） S B Ⅰ・2及びその内部にある遺構の調査を開始し、1日で完掘する。Ⅰ区の写真撮影を行う。Ⅱ区の遺構確認作業を開始する。

4月25日（晴） Ⅰ区の実測作業する一方、住居址等の詳細確認調査を行う。本日でⅠ区の実測調査を完了する。



1-2 Ⅰ区の調査(土塀・井戸址の検出)

4月27日(晴) II区の残土処理と遺構確認調査を終え、検出作業にかかる。

4月28日(曇) S B 3を掘り上げ、S D 2・3を継続調査とする。S D 2の上面に内耳土器がつぶれて発見された。

4月30日(曇) 溝址の調査を進める一方、南半部に散在する土磁群(S D 13~20)の調査にかかる。S D 3は弥生時代の溝址か。S K 20から四耳壺が出土し注目される。

5月1日(晴) S D 4の検出後、II区全体の清掃・写真撮影をし、発掘調査作業を午前中で終了する。午後遺構測量を行いII区における作業を全て終了する。

この後、道路改良工事の進捗状況によりIII区の調査は一時中止する。

5月11日(晴)・12日(晴) III区表土除去作業を東より開始する。ガス管が埋設されており、ガス管北側を地表下120cm程除去し、遺構を確認するも明確にならない。

5月13日(曇・雨) 本日よりIII区の残土処理を開始するも表土除去が足りなかったためか遺構形態が明確にならない。降雨はげしくなり午前中で作業を中止する。午後出勤して来た2名と土器洗浄をしながら、表土除去作業に立ち合う。

5月14日(雨) 雨のため作業中止。表土除去作業が進行しているため、終日立ち合う。

5月15日(雨・晴) 昨日来の降雨により、残土処理が不能と思料されるため作業を18日まで中止する。表土除去作業が継続しているため終日立ち合う。

5月18日(晴) 桃の摘果作業が最盛期を迎え、作業員の参集が悪くなる。III区をa(II区東)・b(II区西の東半分)・c(西半分)に小区分し、検出面の遺物を分ける。工事の都合上a地点をあとにまわし、b・c地点の残土処理を実施する。a地点の残土処理部分(約20cm)の遺構確認を行うも明確にならない。この部分の一部は、後に廃土地としたため調査できなかったが、大溝の一端がかかっている模様。

5月19日(晴) c地点の残土処理



I-3 II区の調査(溝址の検出)

を進めるとともにb地点の遺構検出作業にかかる。確認面は同色同質系で、形態確認に困難を極めた。SB4～6、SE7の調査にかかる。

5月20日(晴) 新たにSB7～9、SE8・9の検出を始める。SB4～6、SD6、SE7・8を完掘し写真撮影をする。

5月21日(晴) 曇り一日、7月中旬の気温とのこと。SB7・9、SE9を継続調査する。SB10、SK21・22の調査にかかる。

5月22日(晴) SB11以西の遺構確認作業を進める。SB11の検出を始める。SB7～9周辺遺構の写真撮影後、SB4～9、SE7～9、SK21・22、SD6の実測をする。

5月25日(晴) SB11を継続調査する。新たにSB12・13、SK23・24の調査を開始する。SB10・11の写真撮影を行う。

5月26日(曇・晴) SB13を完掘する。SE11、SB15の形態確認と掘り下げを開始する。SB12・13付近の写真撮影を行う。

5月27日(曇) SB14・15、ピット群を完掘し、写真撮影を行う。SB10～13、SK23・24、ピット群の測量を実施する。

5月28日(晴) SB11の精査をしたところ東壁はもっと東にあることがわかり、掘り下げ後、写真撮影する。SB14・15付近の補足実測をし、b・c地点の調査を終了する。a区西より残土処理をし、形態が確認できたSB16、SD7、SK26・27から調査にかかる。

5月29日(曇) SB16を完掘し、SD7とともに写真撮影を行う。SB16以降の残土を処理し、SB17、SK28・29を検出する。



1-4 II区の調査(住居址の検出)



I-5 IV区の調査(土壌の検出)

6月1日 S Ⅱ17, S K28・29完掘し、写真撮影後、残土処理を進める。

6月2日(曇) S Ⅱ19・21を調査する。S Ⅱ21の方が新しい。S Ⅱ20は球面がなく、住居址ではないだろう。S Ⅱ16～19とその間の遺構を測量する。調査区残りの部分の残土処理はバックホーを使用して行う。

6月3日(晴) S Ⅱ20を完掘し、写真撮影を行う。S K31・32, S D15～17の調査を開始する。S B18を測量する。この部分に自然堤防を縦断する大溝を発見する。

6月4日(晴) 昨日の調査を続け、完掘後、写真撮影。調査器機器材を撤収し、発掘調査を終了する。

6月5日(晴) S E15～17, S K31～33を測量し、現場に於ける作業を全て終了する。

第3節 調査会・調査団の編成

1 長野市遺跡調査会規約

(目的)

第1条 この調査会は、長野市教育委員会の委託を受けて、長野市所在の埋蔵文化財遺跡の発掘調査の調整企画及びそれに基づく発掘調査・分布調査を実施し、その記録作成と、発掘された文化財の保存活用について、研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は、長野市遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称する。

(事務所)

第3条 調査会の事務所は、長野市埋蔵文化財センター（以下「文化財センター」という。）内におく。

(会長)

第4条 調査会の会長は、長野市教育委員会教育長をもってあてる。

2 会長は、調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

(委員)

第5条 調査会の委員は、学識経験者、調査団長及び事務局職員として、会長が委嘱又は任命する。

(調査団の編成)

第6条 調査の規模、性格その他の特性及び必要に応じ、調査団長・調査主任及び調査員を会長が委嘱する。

(経費)

第7条 調査会の経費は、調査委託料及びその他の取入をもってあてる。

(職員)

第8条 調査会の事務については、文化財センター職員をもってあてる。

(監事)

第9条 調査会に監事をおき、長野市教育委員会事務局総務課長をもってあてる。

(補則)

第10条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この規約は、昭和62年4月1日から施行する。

2 長野市遺跡調査会の組織

会 長 奥村秀雄（教育長）

委 員 米山一政（長野市文化財保護審議会長）

〃 小林 学（ 〃 委員）

〃 関川千代丸（文化財専門主事）昭和62年6月16日退任

〃 丸山義仁（教育次長）

〃 矢口忠良（調査団長）

〃 青木和明（調査主任）

監 事 戸津幸雄（教育次長副任兼総務課長）

事務局長 小木曾敏（長野市埋蔵文化財センター所長）

事務局長 小山 正（ " 所長補佐）

矢口忠良（ " 調査係長）・青木和明（ " 調査係主事）・千野浩（ " 調査係主事）

3 調査団の構成

総括責任者 小木曾敏（長野市埋蔵文化センター所長）

庶務・経理 小山 正（ " 所長補佐）

" 倉田佳世子（ " 職員）

調査団長 矢口忠良（ " 、III区担当、第2・3章遺構執筆）

調査主任 青木和明（ " 、I区担当）

" 千野 浩（ " 、II区担当、遺構整図・第3章遺物執筆）

調査員 中殿章子（ " 、遺構・遺物実測及び整図）

横山かよ子（ " 、 " ）

森山嘉亮（長野県考古学会員）

調査補助員 柳沢和久（愛知学院大学学生、遺物整理・実測）

斉藤孝之（ " 、 " ）

原 正樹（東京経済大学学生、 " ）

調査作業員 伊藤きよみ・伊藤たき子・伊藤忠治・小幡つやの・北沢やすい・北村利雄・小出

史子・三宅けさみ・三宅忠正・三宅利正・宮崎保雄・宮長周蔵・矢島喜和子・矢

島善次・矢島秀子・渡利つや子・内山直子・大田豊一・関口とし子・山岸さよ子

整理作業員 関沢治子・徳成奈於子

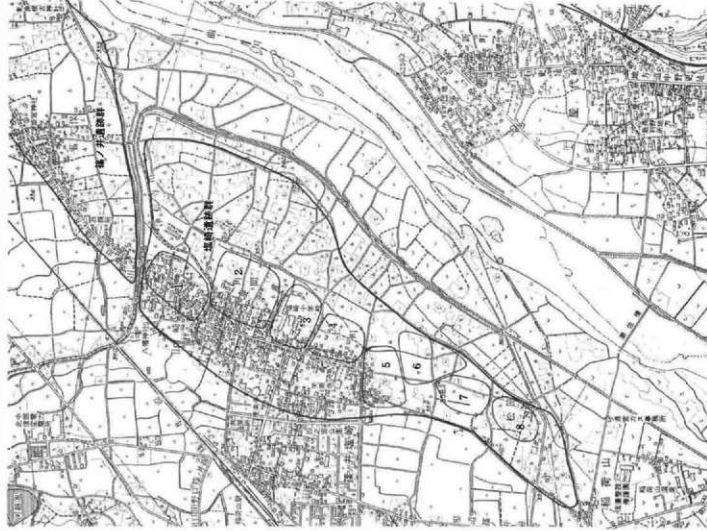
以上の方々他に、矢島善次氏には作業員の手配等で手を煩わせ、伊藤勝美氏・後藤沖太良氏・後藤茂廣氏には、電話・水道・天幕設営敷地の提供等でお世話になり、一城建設社には調査に際し何かと便宜をいただいた。記して感謝申し上げます。

第2章 調査地周辺の環境

本調査地は、長野市篠ノ井角間字北殿屋敷と字南下榊地籍にあり、塩崎遺跡群の北側に位置する。もとよりこの遺跡群は、千曲川左岸に展開する自然堤防上にあり、直線距離にて南北約2.1km、塩崎小学校付近の東西間は約0.85kmの広大なものである。そのため従来は、遺物採集地の小字名等を取り、小範囲分割し個々の遺跡名として呼称して来た。それは上流から、銅鐸と同石製榎遺品の出土した松節遺跡、この自然堤防で初めて弥生時代住居址を検出した中条遺跡、弥生文化の波及期の土器が採集されている伊勢宮遺跡、弥生時代の炭化米が出土した一本木遺跡、プール建設時に弥生時代後期の完形土器が多量に出土したという塩崎小学校敷地遺跡、旧篠ノ井市指定文化財であった葉形灰釉陶器が出土した殿屋敷遺跡、そして最も北に山崎遺跡等の学史上著名な遺跡が連続する。しかし昭和52年に発表された長野県教育委員会による遺跡地図では、これらを大きく塩崎遺跡群と取り扱うようになった。それは分布調査による表面採集の成果と地形的に区別する要素がないことを考慮したものである。昭和52年～54年度の塩崎小学校校舎改築工事に先立って実施された緊急発掘調査では弥生時代中期から平安時代にかけて、約2,200㎡の空間に、住居址86軒・建物址3軒・柱穴群1ヶ所、方形周溝墓1基・溝址5ヶ所・井戸址4基・土壇7基を検出し、更に昭和59年度の塩崎児童館建設予定地の調査では、奈良時代を中心とする10軒の住



11-1 塩崎遺跡群遠景(西より)



1. 山崎通 2. 坂田通 3. 坂田小学校前通 4. 坂田通
5. 一本木通 6. 伊勢通 7. 中央通 8. 坂田通

II-2 坂田通新と旧地点通

居址を確認している。また昭和60年度に自然堤防南半分程を縦断するように調査した市道松節-小田井神社地点遺跡(松節・中条・伊勢宮・一本木の各遺跡の一部を含む)では、延長623m(2754㎡)に弥生中期から平安時代にかけて、住居址192軒以上・土壇墓(木棺墓含)31基・土壇(井戸址含)113基・溝址33ヶ所等の発見に及び、遺跡の中心はどこにでも存在し、それも一連の流れの中に存在することを実証している。ことはどさように、学史上地点遺跡名称としてこれらを使い分けできようが、総体として一つの遺跡名をもって代表させることは困難である。こうした意味からも、本遺跡を塩崎遺跡群殿屋敷遺跡市道角間線地点として、通称市道角間線遺跡とする。

調査地は宅地の中にあり、標高約356mである。ちなみに塩崎小学校で357.6mであったものが調査地東西線の東端付近で356.2mになり、浄信寺川横の道路で355.2mになる。自然堤防は塩崎小学校付近から北に傾斜し、調査地内でも65mの間に1m程の比高差を有する。そして山崎地帯にかけ徐々に高くなる。これは今回の調査で明かとなった無遺構地域が存在したことと考え合わせると、古くから地形の変換点があり、浄信寺川凹地があったことをうかがわせる。

〔参考文献〕

塩崎村史刊行会『塩崎村史』昭和46年

更級地科地方誌刊行会『更級地科地方誌第二巻』昭和53年

長野市教委『塩崎遺跡群-塩崎小学校地点遺跡第1～3次調査-』昭和53-55年(3分冊)

長野市教委『塩崎遺跡群IV-市道松節-小田井神社地点遺跡』昭和61年

第3章 調 査

第1節 遺構の分布状態(Ⅱ-1~5)

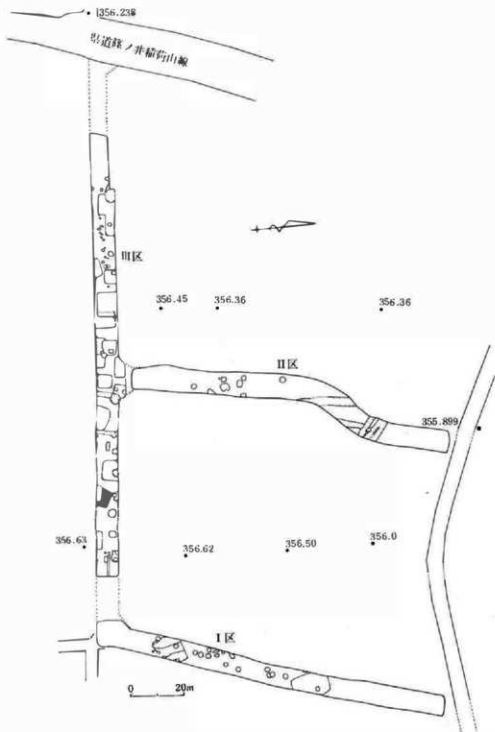
工事の工程上、東側の南北支線をⅠ区、西側の同支線をⅡ区、東西の幹線をⅢ区と呼称したことは、前にも記した。これ以後の記述もこの例にならう。Ⅰ区は、Ⅲ区から約40m以北、弥生時代の1号住居址を境に、遺構が認められなくなり、遺物の出土量も激減する。またⅡ区でも同様なことがいえ、やや北にある中世の溝を境に無遺構地域になる。ただ両区とも住居址の数が少なく、土塙・井戸址が目につく。Ⅱ区との接点部は、残土処理した土盛場としたため十分な調査ができなかったのと、下部層に遺構面の存在判断できなかったことによるものと思われる。Ⅲ区では遺構の確認を容易にするため、他区より20cmほど深く掘り下げ調査を実施した。そのため18号住居址のように床面を確認したにすぎないものもあり、住居址の掘り込みが浅い検出のものもある。こうした面から考えると、Ⅰ・Ⅱ区の調査は意外と正確な遺構を提示しているのかもしれない。とりもなおさずⅢ区から住



Ⅲ-1 Ⅰ区の遺構



Ⅲ-2 Ⅱ区の遺構



III-3 調査地内の遺構分布図(1)

居址の検出例が増加し、また重複関係にある住居址も見られ、この地点あたりから塩崎遺跡群が南に展開するようである。ただ山崎遺跡の取り扱いについては、遺跡の内容及び地形的にそう違うものでないように推定され、従来通り塩崎遺跡群内の遺跡とする。

第2節 縄文時代の遺物

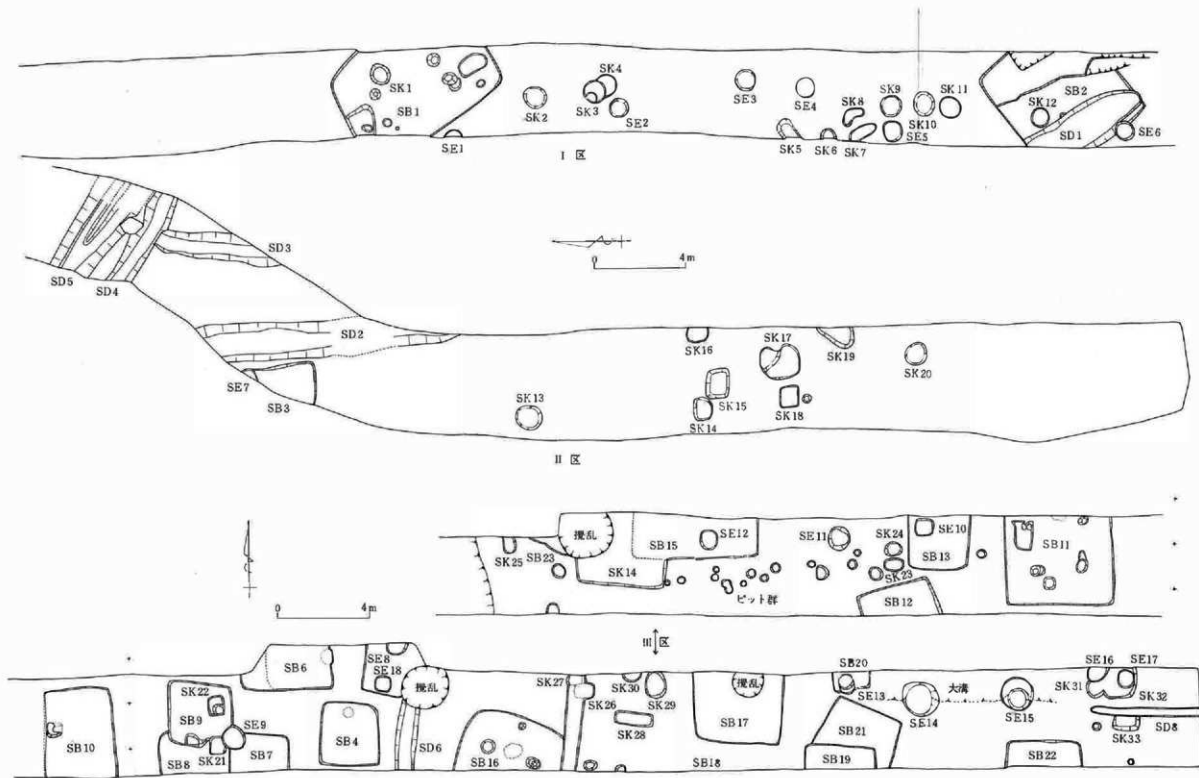
塩崎遺跡群内で縄文時代晩期終末に位置する土器片が出土している所は、一本木遺跡と伊勢宮遺跡がある。この時期にはすでに自然堤防と何らかのかかわりを有してこの地まで進出して来たと思われているが、遺構を伴わず、単独出土であるためその内容がいかなるものかは今のところ不明である。さて本調査地でも該期の土器1片が出土している(III-6)。1号住居址覆土からのもので、鉢形の精製土器と推定される。口縁部外面に2本の沈線がめぐり、その下は浮線網状文になる。内外面ともいいねいにかかれ光沢を帯びる。焼成は良く、胎土に微砂粒を混入している。淡黄褐色を呈する。外面は剥離しているが、破損部の角には著しい磨耗が認められない。



III-5 III区西側の遺構



III-6 縄文時代土器拓影



III-4 調査地内の遺構分布図②

第3節 弥生時代の遺構と遺物

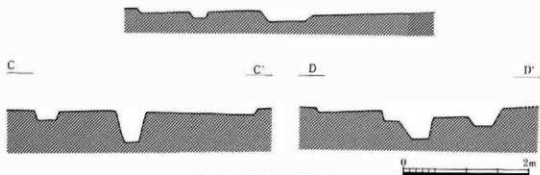
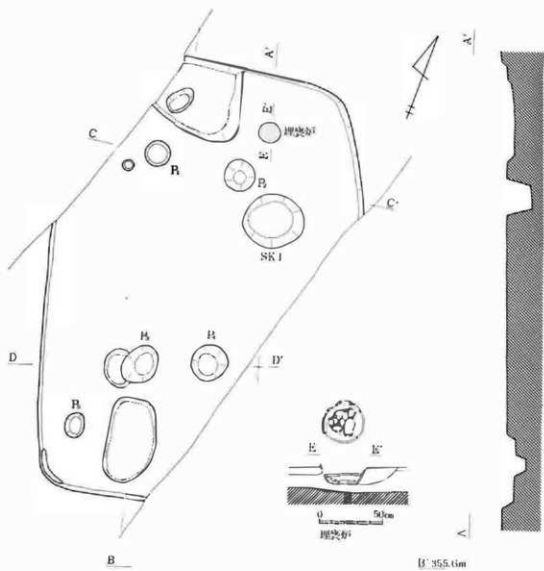
当該期の遺構及び遺物は、予想外に少なく住居址2軒と若干の遺物を検出したにすぎない。また時期も後期に編年されるもので、中期の遺構・遺物は存在しなかった。この地での集落の開始は後期からの展開といえよう。

1号住居址

遺構(III-7-9) 1区の中央付近、遺構としては北端の、淨信寺川から序々に傾斜を高めた平坦近くに移行する地点にある。北西隅部と南東隅部付近は調査地域外に延びるため住居址全体を露呈することはできなかった。本址内北側に平安時代の1号土塙がある。住居址形態は隅丸長方形を呈し、長軸7.05m・短軸4.95mの規模になる。長軸方位はN-15°-Wである。検出面からの掘り込みは浅く、北壁7cm・南壁6cm・東壁11cm・西壁6cmを測るにすぎない。床面は地形勾配と同様北側がいく分低くなるものの平坦で軟弱である。柱穴は5個確認され、 P_1 ・ P_3 が支柱穴と推定されるが、 P_1 と対をなす北東隅のものが見あたらない。掘り込みの深さ等から P_1 ・ P_4 が



III-7 1号住居址、1号土塙、1号井戸址



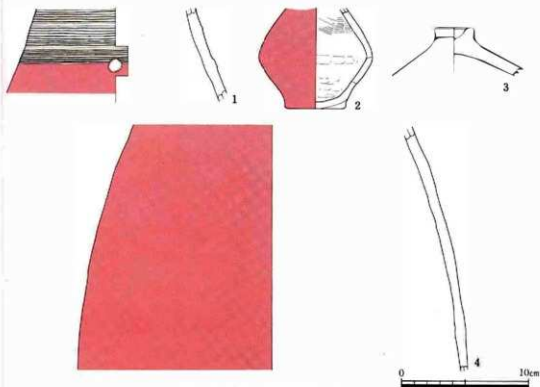
III-8 1号住居址実測図

支柱穴の可能性もすてがたい。炉は壺の体部上半を逆位に埋設したもので上面の径33cm・深さ15cmを測り、底面に同個体の頸部破片が敷かれていた。炉の埋設にあたっての掘り込みは北側から南側の土器が密着した部位まで約60cmを測る。内部には下から4cm程の灰層、その上部に約1cmの炭層が認められた。ただ気になるのは柱穴と同様炉の位置の問題である。通常柱穴間の中央で住居址内に設置されるが、本址のものはこの規格からはずれている。この他の施設として意味不明の土壇状の浅い掘り込みが北壁中央下と南壁寄りに確認され、また南西隅部だけに周溝状の遺構がある。

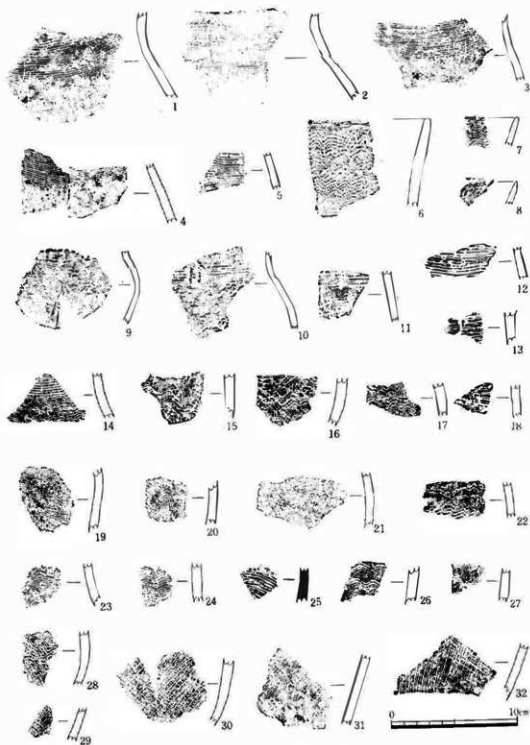


III-9 1号住居址炉

遺物(III-10・11) 出土遺物のうち図上復元できるものは壺3個・蓋1個であるが赤色塗彩された柄・高坏片も出土している。III-10-1は壺の頸部で図示した部分はほぼ完存する。文様は、描横線文を3帯以上、上から下へ施文した後に円形浮文を貼付する。文様帯下は斜方向のハケ調整後ていねいなへら磨きが施され赤色塗彩される。内面の調整は剥落が著しいため観察できない。



III-10 1号住居址出土土器実測図



III-11 1号住居址出土土器拓影

4は大形の壺体部上半である。外面はていねいにへら磨きが施され赤色塗彩される。内面はこの土器が炉として利用されていたため剥落が著しい。2は小形の壺形土器で頸部以上を欠損する。外面の体部上半は下半に比べてていねいにへら磨きで仕上げられているが、全面に赤色塗彩が施される。内面の調整は横ハケナデ指頭によっているが雑である。底部内面に赤色顔料が付着しており、頸部より上が赤色塗彩されていたことをうかがわせる。3は蓋の天井部付近の破片である。つまみ部の頂部は凹み、ナデ調整される。外面は不定方向に比較的ていねいなへら磨きが施されている。内面も同様であるが外面より雑に仕上げられている。この他Ⅲ-11で図示したように壺と甕の破片が出上している。共に櫛描横線文を基調としており、4と5を除き他にはこの横線文をへら状施文具で縦に切る所謂T字文が認められる。6-32は甕の破片である。6-8は口縁部付近で、6の頸部には櫛描横線文があり、8の口辺部は無文帯とある。9-14は頸部から体部上半の破片で、頸部屈曲部には12を除き簾状文が認められ、この上下には櫛描波状文がめぐり、特に9の波状文は振幅・波長とも短かくていねいである。15-32は体部下半の破片である。体部下半まで雑な波状文をめぐらすものが多い。28-32は底部付近の破片であろう。28にみられるように波状文下に施文せられるへらによる斜行線文による格子目風な文様を構成する。

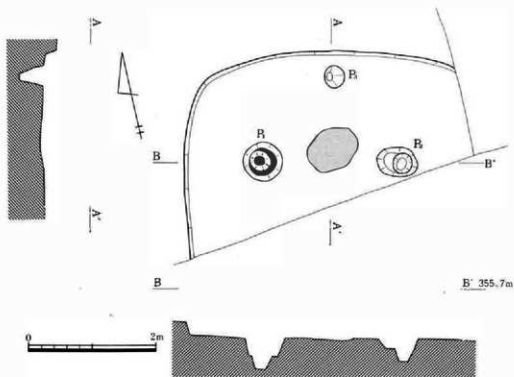
16号住居址

遺構(Ⅲ-12) Ⅲ区中央付近にあり、住居址のほぼ4分の1程検出したものと思われる。更に東端は7号溝址と重複し破壊される。形態は隅丸長方形を呈するものと思われ、今回調査した部分は短軸部である。短軸(東西壁間)の規模は4.06m前後と推定され、長軸方位はN-11°-Eを指す。掘り込みは平坦で東壁21cm・西壁で20cmを測る。床面は平坦で、P₁とP₂の石柱穴間のやや北よりに径65cm・深さ4cm程の地床炉がある。

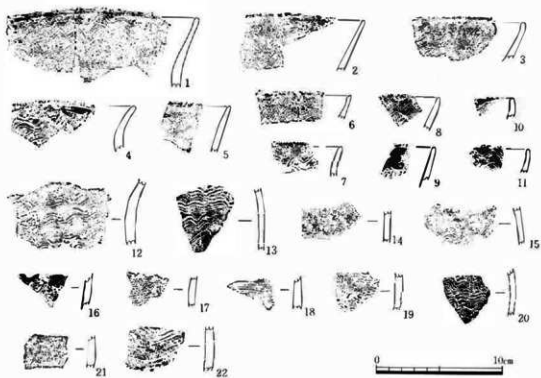
遺物(Ⅲ-13) 出土量は多くなく器種に透しのある高坏脚・壺・甕・小型壺が出土している。拓影にしたものは、全て甕の破片である。1-3・6-11は同一個体で、口辺部はやや内傾する。4は外開し、5・7は直線的に立ち上がる口縁部になる。ともに波状文帯がめぐり、他は頸部及び体部の破片であるが、12の頸部文様は波状文であるのに対し、18は横線文が施されている。体部文様は波長・振幅とも大きい波状文を基調とするが、17のそれは波長・振幅とともに小さい。22は3本歯の櫛状工具により施文されている。

遺構外出土の土器(Ⅲ-14)

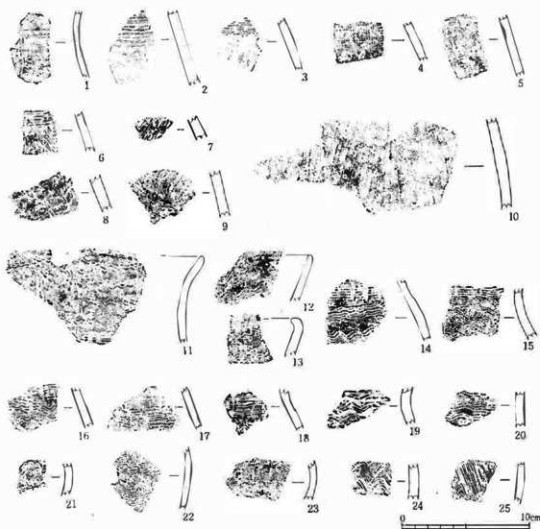
遺構検出中あるいは他時期の遺構から出土したものをここで扱う。出土量はそれ程多くなく、その大半は1号・16号住居址周辺からの出土である。他の遺構からは、9号住居址よりの高坏片が、4号溝址から甕・壺の体部片が、6号溝址より壺体部片2点、5号井戸址より壺片が、6号井戸址より甕体部片2点・1号土塙(1号住居址内)より高坏・壺片が、15号土塙より柄(浅鉢)



III-12 16号住居址実測図



III-13 16号住居址出土土器拓影



III-14 遺構外出土土器拓影

片が、17号土壇より壺片が、26号土壇より高坏片が出土している。もとより個数を記していないものは1点であり、これらには図上復元できるものはない。III-14に拓影にしたものは、文様の施文された土器片で、壺(1~10)と甕(11~25)の器種だけである。壺の頸部文様は、栴描横線文がめぐらされるもの(1・3~6)とヘラ描横線文のもの(2)があり、更にヘラによる1本の丁字文(1)と栴由による丁字文(4)が加飾され、5の横線文は巒状文になる。そしてその下方を鋸歯文が施される(5~9)。7・9・10は同一個体であるが、10はヘラ描斜行条線になる。11~13は甕の口縁部付近の破片で、11・12の口辺部は幾分内傾しているのに対し、13のそれは強く内屈している。文様は頸部を除き口縁部から体部下半まで波状文帯で埋められている。11・14~18の頸部文様は巒状文であるが、19には認められない。25は他のものと異なり、栴描による斜行線文

になる。

第4節 奈良時代の遺構と遺物

弥生時代に次いで過去の調査例から古墳時代の遺構・遺物が普遍的に確認されているが、本調査地では全く認められなかった。この付近には古墳時代の集落が存在しなかったことを裏付けてい、再度集落が形成されるようになるのは奈良時代のことである。しかし遺構数は少なく、住居址5軒・溝址2ヶ所確認されているだけで、また遺物量も少ない。所在の位置も調査地西側に偏りを見せる。

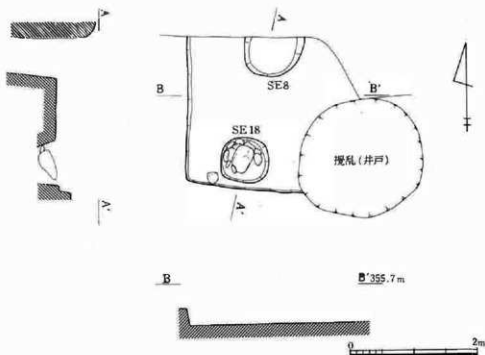
5号住居址

遺構(III-15・16) III区の中央付近でII区との接点から検出された。調査では東側は現存井戸により破壊され、北側は道路接点工事のため確認できなかった。そのため規模等不明な点が多い。また本住居址内に8号・18号井戸址がある。形態は方形を呈すると思われる。床面は平坦であるが西側に緩分傾斜を有する。掘り込みは南壁で20cm・北壁で28cmを測る。この他調査範囲内で柱穴及びカマド等の施設は確認できなかった。

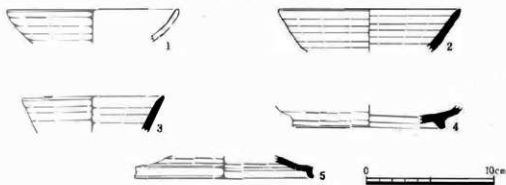
遺物(III-17) 出土量は多くなく。それも全て破片出土である。器種に土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕がある。1は土師器の坏で、外面はロクロナデ調整された後体部下半に静



II-15 5号住居址(右)、4号住居址(左)、6号住居址(上)



III-16 5号住居址、8号・18号井戸址実測図



III-17 5号住居址出土土器実測図

止へら削りされた痕跡が認められる。内面は横方向にいてないへら磨きが施され黒色処理される。口径14.2cm。2・3は須恵器坏とともに内外面にロクロ調整痕を顕著に残す。2は完全に還元炎焼成されず暗橙褐色を呈する。2の口径は13.6cm、3のそれは11.2cmである。4は高台付坏で、内外面ともロクロナデされ、底部は回転へら削り調整される。高台は貼り付けの角高台である。底径11.8cm。5は蓋で、天井部を欠損し、酸化炎焼成である。口径14.2cm。

8号住居址

遺構(III-19-20) III区の調査地中央付近から検出されたが、東壁は7号住居址と北壁は該期

の9号住居址によって切れ、南半分は調査区外へ延びる。そのため本住居址で確かなものは西壁の一部と床面の北半分付近だけである。形態は方形になるものと思われ、西壁での掘り込みは11cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマド・柱穴等の施設は確認できなかった。



遺物(III-18) 出土量は少なく、全て破片で覆土中か

らの出土である。器種に須恵器高台付坏・蓋・甕・高盤 III-18 8号住居址出土土器実測図があるが、図上復元できるものは高盤脚片と思われるもの1点である。これは口径16cmの蓋形を呈するもので、口唇部は面取りされるが外に開き、脚中で鈍い段を形成する。調整はロクロナデによるが、内面は雑に仕上げている。

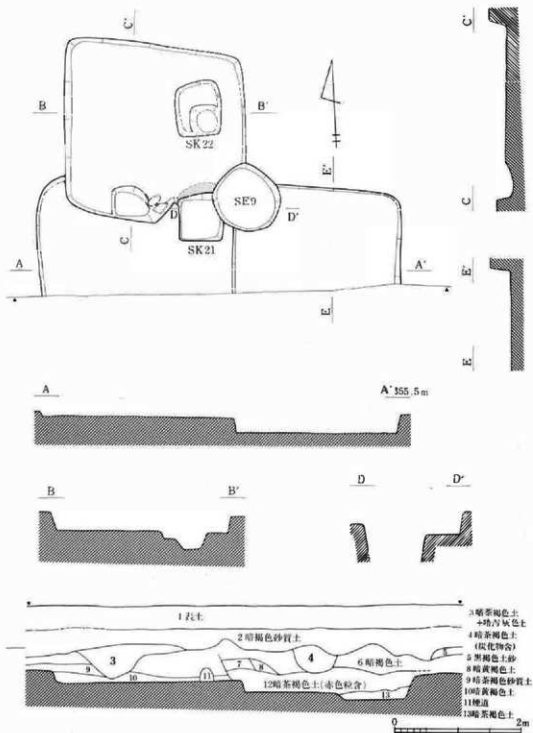
9号住居址

遺構(III-19) 8号住居址の北側にあり、南東隅を9号井戸址と21号土壌によって破壊を受け、住居址内に22号土壌があるもののほぼ全城を露呈することができた。形態はやや不整の方形を呈し、一辺で2.8m程の小規模なものである。カマドは南壁中央付近に設けられ、調査時では焼土塊及び構築石材の一部が残されていた。主軸方位はN-5°-Eである。またカマド右側に長軸65cm・短軸54cm・深さ28cm程の貯蔵穴がある。掘り込みは直に近く、北壁24cm・南壁18cm・東壁19cm・西壁30cmを測る。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴は確認できなかった。

遺物(III-21) 出土量はそれほど多くなく、器種に土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕がある。



III-19 8号(下右)・9号(下左)住居址、22号土壌

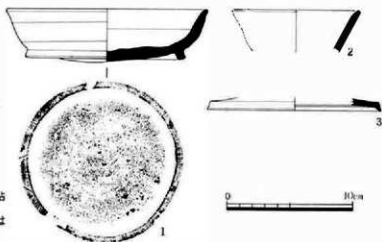


田-20 7号~9号住居址、21号・22号土壇、9号井址実測図

図上復元できるものは全て須恵器である。1は高台付坏ではほぼ完形を呈する。坏部は内外面ともにロクロナデ調整が施され、底部外面は回転ヘラ削りの後ナデ調整され丸味を帯びる。断面が方形状を呈する高台が底部外縁に貼付されるため坏底部中央は高台水平面よりはみ出す。

口径15.8cm・底径11.6

cm・器高4.2cm。2は小形の坏でロクロナデ調整によっているが、ロクロ目は顕著でない。暗橙褐色を呈する。口径10.0cm。3は蓋の口辺部の破片で天井部は平坦に近い。口径14.0cm。



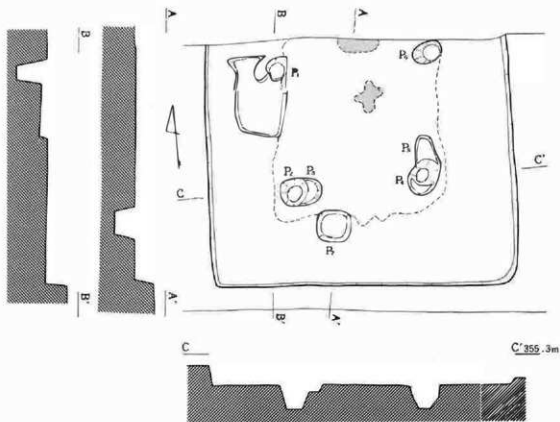
III-21 9号住居址出土土器実測図

11号住居址

遺構 (III-22・23) 9号住居址の西側に位置し、東壁側の一部上面は10号住居址と重複する。遺構検出の際10号住居址のカマド西端が直線的に破壊を受けていたため本住居址の方が新しいも



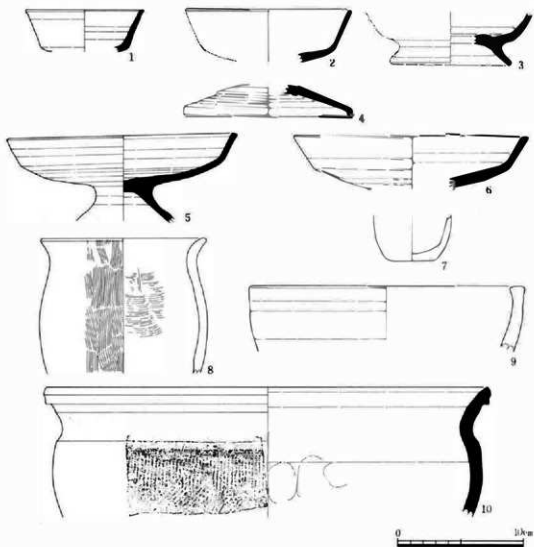
III-22 11号住居址



III-23 11号住居址実測図

のと考えていたが、後にそれは水道管理設によるものとの判明し、10号住居址を再調査したところ更に東側に延び規格的な住居址を検出することができた。プランはカマドの位置等から方形を呈するものと思われ、東西軸4.85mを測る。主軸はほぼ南北方向になる。カマドは北壁の中央に構築されるが、調査地内では焼土塊化した火床と思われる部分が検出されるので既に破壊を受けていた可能性がある。主柱穴は4本方形配列に掘られ、 P_1 ・ P_2 ・ P_4 ・ P_6 がそれにあたる。床面は平坦であり、主柱穴付近とその内部は良くつき固められて硬い(点線内部)。検出面からの掘り込みは南壁35cm・東壁27cm・西壁33cmを測る。他に住居址北西部に深さ14cm程の不整形な掘り込みが認められるが、何のための施設か不明である。

遺物(III-24) 出土量は比較的多く内容も豊富である。器種には土師器(手裡土器)・甕・須恵器(高台付杯・蓋・高台付盤・甕・高坏等)が認められる。杯で図上復元可能なものは全て須恵器で、1は内外面ともロクロナデされるが、内面の調整は雑である。口径9.3cm。2は高台付杯であるが高台部が欠損している。底部は回転へう削り痕を残す。口径13.0cm。3・5・6は須恵高台付盤である。3の内面は雑なナデ調整が施されている。高台はハの字状に



III-24 11号住居址出土土器実測図

短く開き端部で内湾する形態になる。外面に自然輪がかかる。5・6はともに同様の形態になるものと思われる。整体部中程に鈍い稜を形成し、口縁部がここから直線的に外反する。高台は短く大きく開き、中位で鈍い段を形成するものと思われる。内外面はロクロ調整によっているが、盤底部付近の外面は回転へら削りにより整えられる。5の口径は17.7cm、6は18.6cmである。4は須恵器の蓋であるがつまみ部付近を欠損している。口縁端部は喙状になるもの厚い。口径13.3cm。7は土師器の手捏土器と思われる土器で楕形を呈する。調整は内外面ともに雑なナデがなされているだけである。底径3.8cm。8は土師器の甕で、口縁部は頸部から緩やかな弧を描いて短く外反し、体部は肩の張りが少ない長胴で、体部最大径は中位上方にあるものと推定する。外面は口

縁部を横ナデした後全面にわたって縦・斜方向のハケ調整を施す。内面は口縁部が横ナデ、体部が横ハケナデになる。口径12.8cm。9は土師器の鉢になるものと思われる。底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口唇部は面取りされ肥厚する。内外面ともロクロ調整である。口径20.0cm。10は須恵器の甕というよりも深鉢といった方が良かろう。口縁部は頸部よりくの字状にくびれて外反する。外面は口頸部に比較的強いロクロナデが行われ、その後体部に格子目タクキが施される。内面は全体にたいないなロクロナデになる。口径35.0cm。

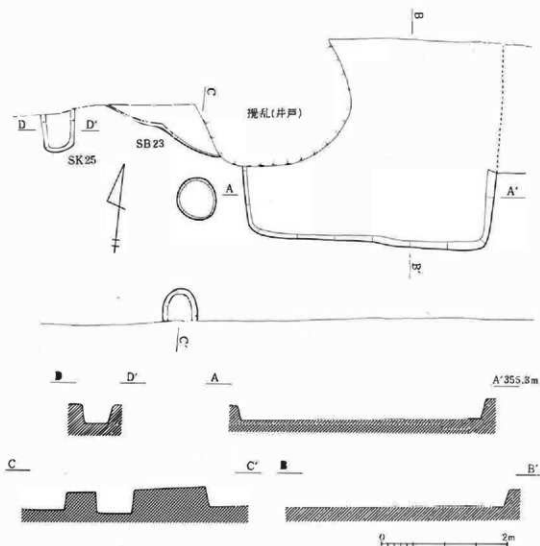
14号住居址

遺物(III-25・26) III区調査地の西側付近から検出され、北側半分以上を15号住居址及び現存した井戸により破壊を受ける。形態は一辺3.85m程の方形を呈するものと思われる。また主軸も東西軸線上にあるものと推定される。検出面からの掘り込みは南壁24cm・東壁31cm・西壁23cmである。床面は平坦であるが西に幾分傾斜している。カマドは井戸による攪乱地内の西壁中央に構築されていたものと思われ、焼土及び多量の炭化物が認められたほか出土遺物のほとんどがこの付近より採集された。柱穴は認められなかった。

遺物(III-27) 出土量は他の遺構に比べ多い。器種に土師器坏・甕(7~9)、須恵器坏(3~5)・高台付坏(1・2)・蓋・長頸瓶(6)・甕がある。1の底部は回転ヘラ削りが施され丸味を帯び

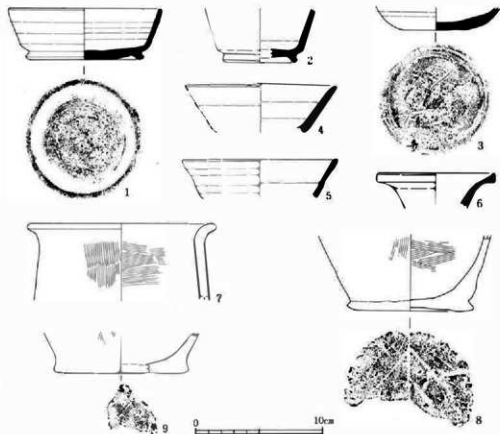


III-25 14号・15号住居址、12号井戸址、ビット群



III-26 14号・23号住居址、25号土坑実測図

る。色調は全体に橙褐色を呈するが、焼成は良い。2は小形で坯身の深い形態になる。底部調整は回転ヘラ削りによる。1・2とも底部外縁に角高台が貼付される。1の法量は口径12.1cm・底径9.0cm・器高4.0cmであり、2の底径4.4cmを測る。3は底部付近の破片で、外面の調整は静止ヘラ削りである。底径5.1cm。4・5はロクロ調整され、5にはロクロ目が目立つ。4の色調は橙褐色を呈し、他は青灰色である。4の口径は11.8cm、5は12.2cmである。6の長頸瓶の口縁部付近の破片と思われ、ハの字状に大きく開き、端部は断面が三角形に立ち上がる。外面に自然釉の付着が見られる。口径9.1cm。7～9は甕である。7は口縁部が頸部から緩やかなくの字状をなして短く外反し、体部中位付近に最大径を有し、肩の張らない長胴を呈する形態になるものと思わ

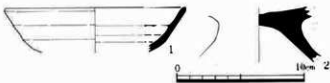


Ⅱ-27 14号住居址出土土器実測図

れる。外面調整は、縦及び斜め方向のハケナデがなされた後、口縁部に横ナデが用られる。内面は口縁部に横ナデ、体部に横及び斜め方向のハケナデ調整になる。口径14.6cm。8の底部は横に突出し、上げ底になり、木炭痕を残す。体部外面はハケで調整され、内面は同手法後雑なナデが施されている。底径10cm。9も8同様の形態を呈し、上げ底気味で木炭痕を残す。底径10.8cm。

3号溝址

遺構(Ⅲ-29・30) II区中程の地形変換点付近の遺構である。4号溝址により切られているが、南から北へ傾斜し、該期の5号溝址に接続し終結すると思われる。調査地内で確認した規模等は長さ5.8m・最大幅1.5m・最小幅0.9m・深さ約0.7m・溝底幅平均0.5mを測り、断面が逆台形を呈する溝である。掘り込みは釜盤層である暗黄褐色砂質土層の上



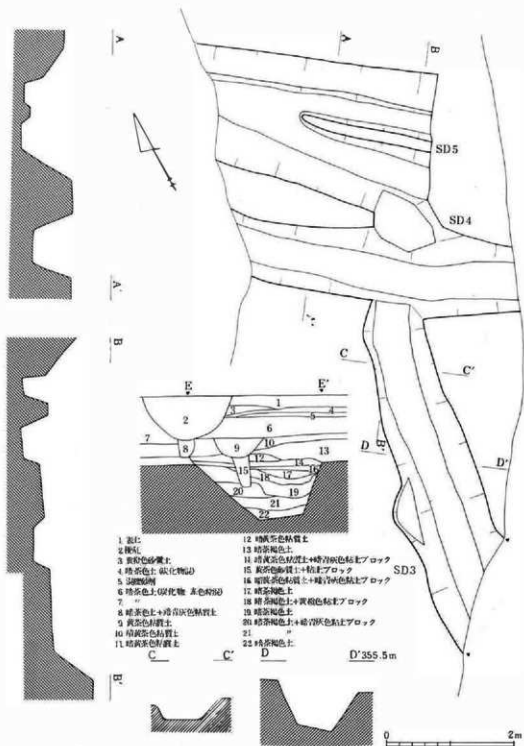
Ⅲ-28 3号溝址出土土器実測図



III-29 3号溝址



III-30 3号溝址断面



III-31 3号~5号溝址実測図

層の暗黄茶色粘質土層からである。溝内の堆積土層から観察すると序々に埋設していた様子がうかがえる。

遺物(III-28) 全て破片出土で、器種に土師器環・甕、須恵器環(1)・蓋・高台付盤(2)・甕がある。また覆土中より大形獣骨片が、上面より内耳土器片が出土している。1の環は内外面ともロクロナデされ、内面にはその痕跡を顕著に残す。口径14.2cm。2は高台部の破片で、内外面ともロクロ調整が施される。

5号溝址

遺構(III-31・32) II区北端に位置する遺構で、東から西に傾斜する溝である。調査地中央より東側では2本の溝になり、南溝・北溝と呼称する。断面形状は3号溝址と同様逆台形状を呈し、その規模は南溝の平均幅が1.05m、北溝で1.0m、合流地点では約2mを測り、検出面からの深さは共に0.8m程である。

遺物(III-33) 出土量は少なく、それも覆土からの出土である。器種に須恵器環・蓋・高環(1)・鉢(2)・甕がある。1は高環脚部片と推定する。裾端部はハの字状に短く外開し、断面三角形を呈して立ち上がり、体部は細い筒状になる。内外面ともロクロ調整される。底径10.5cm。2は鉢形土器で、体部は底部より内湾しつつ立ち上がり、口唇部は面取りされて横方向にやや肥厚する。外面体部下半には2本の平行沈線文がめぐらされるが、基本調整は内外面ともロクロによっている。口径29.4cm。



III-32 5号溝址



III-33 5号溝址出土土器実測図

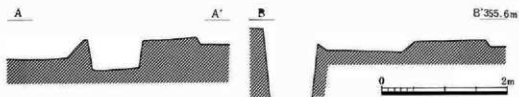
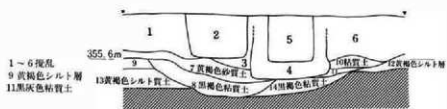
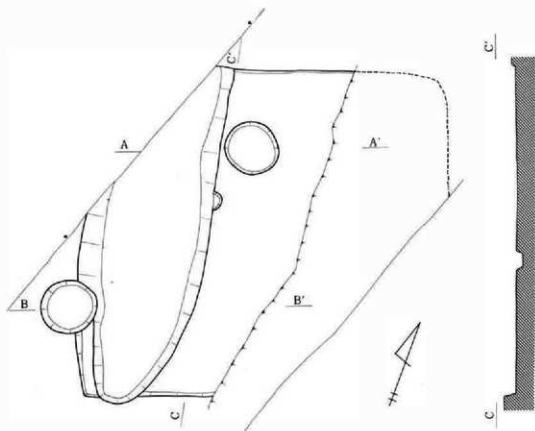
第5節 平安時代の遺構と遺物

今回の中で、該期の遺構数及び遺物量は最も多い。住居址15軒・溝址3ヶ所・土壇9基を数える。しかし住居址においては覆土中の遺物から別に否定する根拠もないので当該期に年代を求めたり、カマドの存在を認めぬままに遺構名を記したものもある。井戸址においては当該期の出土遺物だけが認められたもの2基があるが、形態等で中世のものとのあり方と相違がないので、後出所産のものとして扱った。また土壇においては本期の遺物の出土をみた遺構のみ記載し、他は時期不明の項で記すが、本期のものが大部あるように思える。以上の点をあらかじめおこわりしておく。

2号住居址

遺構(III-34・35) 1区の南端に位置する。南東隅及び北西隅付近は調査区外にあり、ほぼ全面を検出することができたが、住居址内は、西半分に1号溝址と重複し、東側は近世以降の攪乱を受けている。更に12号土壇・6号井戸址によっても破壊される。形態は一辺5.30mの規模を呈するものと思われ、南北軸は17°西に傾く。掘り込みは検出面から北壁7cm・南壁4cmを測る浅い住居址である。床面はやや東からの傾斜を有し軟弱である。主柱穴・カマド等の施設は認められなかった。

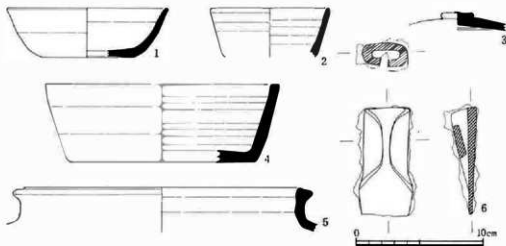
遺物(III-36) 検出遺物は1号溝址と後世の攪乱層と混在してしまい、特に溝址のものと別離することができない。攪乱部からは、若干の該期の土器片と内耳土器片・近世陶器片1片が出土している。さて本遺構と直接結びつく土器と考えられる器種に、土師器内黒坏・ロクロ調整痕のある甕、須恵器坏(1・2)・高台付坏・鉢形坏(4)・蓋(3)・甕(5)、灰釉陶器細口瓶があり、このほかに鉄釜(6)も出土している。1は完全な還元炎焼成がされず内外面とも暗褐色を呈する。底部外面には回転糸切り痕を残す。口径12.7cm・底部7.4cm・器高3.9cm。2は体部が直立し、



III-34 2号住居址、1号溝址、6号井戸址、12号土壌実測図



III-35 2号住居址、1号溝址、12号土壇、6号井戸址



III-36 2号住居址出土遺物実測図

坏身が比較的浅い坏で、内外面とも顕著なロクロ目を残す。口径9.2cm。4は鉢形坏としたが特異な器形で、底部外面まで自然軸が見られることから後出の埴物のサヤ鉢の可能性が強い。暗青灰色を呈す。体部は底部から直線的に立ち上がり、口唇部は面取りされ平坦である。口径18.6cm。3は蓋の天井部付近の破片で、つまみは偏平擬宝珠形を呈する。5は瓶の口縁部片で、端部は断面三角状に外方へ突出する。内外面ともロクロ調整である。口径22.0cm。6は厚手の鉄板の両側を折り返して柄の着装部をつくり出す袋状鉄斧である。焼化が著しく詳細は不明だが木質部の痕



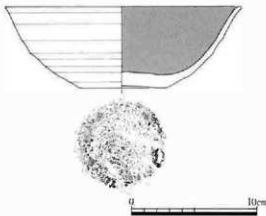
III-37 3号住居址、2号溝址、7号井戸址

跡は認められない。また刃部先端は欠損している。現状での量は全長8.5cm・基部幅3.7cm・刃部幅3.9cmである。

3号住居址

遺構(III-37-83) II区の北端近くに位置し本区で確認できた唯一の住居址である。しかし北西側の大部分は調査区域外にあり、また7号井戸址と重複しているため南東隅付近を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われる。規模等は不明である。掘り込みは南壁14cm・東壁9cmを測る。東壁はほぼ南北軸線上に延びる。

遺物(III-38) 出土量は少ないが、土師器坏(内黒とそうでないもの2種)・埴・埴志器坏の破片が出土している。図示したものはほぼ完存する土師器坏である。外面はログロ調整痕が顕著に残る。内面は口縁部が横方向、体部から底部にかけ縦方向の比較的ていねいなへら磨きが施され、黒色処理される。底部外面には回転糸切り痕を残す。口径18.6cm・底径7.0cm・器高6.5cm。



III-38 3号住居址出土土器実測図

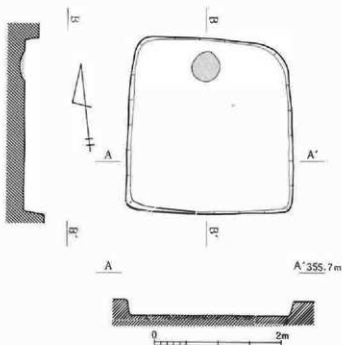
4号住居址



III-39 4号(上)・5号住居址(左下)、6号溝址

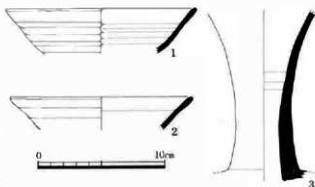
遺構 (III-39-40) II区中央のII区との接点付近に位置する。単独で、しかも住居址全体を検出することができた。形態は幾分南壁の長い隅丸方形を呈し、主軸(南北軸)2.75m・東西軸2.65mの規模になる。主軸線の方向は $N-9^{\circ}-E$ である。掘り込みは北壁20cm・南壁25cm・東壁23cm・西壁33cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマドは北壁中央に構築してあったものと思われるが、調査では径約50cm程凹んだ火床と焼土を検出したにすぎない。

遺物 (III-41) 遺物の出土量は少なく、それも全て破片である。器種に土師器壺、須恵器杯(1)・



III-40 4号住居址実測図

2)・高台付坏(酸化焰焼成)・蓋・長頸瓶がある。1・2の坏は体部が大きく外開しながら直線的に立ち上がる器形になる。1の内外面には顕著なロクロ調整痕を残し、橙褐色を呈する。1の口径は15.0cm, 2は14.4cmを測る。3は長頸瓶の頸部片である。肩部との接合部から直に近く立ち上がりつつだいに外反する器形になる。内外面とも比較的ていねいにロクロナデされる。また自然釉が厚くかかっている。



III-41 4号住居址出土土器実測図

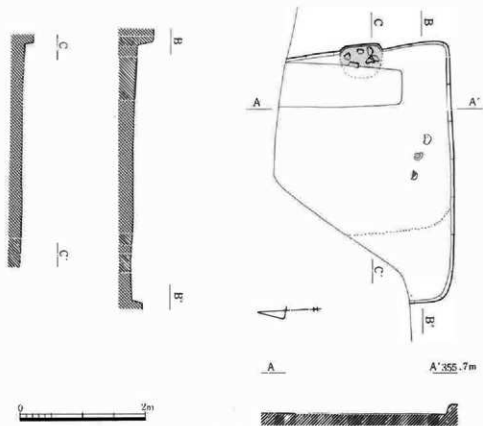
内外面とも比較的ていねいにロクロナデされる。また自然釉が厚くかかっている。

6号住居址

遺構(III-15・42・43) II区とIII区の接合部に位置する。住居址の北半分はII区へ延びるが、既に工事が着工されており調査を断念した。また西壁は調査区域外にある。形態は主軸(東西)が長い不整形長方形を呈するものと思われる。南壁の規模は4.15mを測る。掘り込みは南壁18cm・東壁16cm・西壁17cmの深さになる。床面は平坦であるが東から西に傾斜する。またカマド付近から西壁から1.2mの内方の床面は堅緻とはいかないまでも堅く良好である(領線内)。この点を考慮すれば、一辺3m位の住居を拡張して使用した可能性もでてくる。そうすれば東壁にあるカマドも



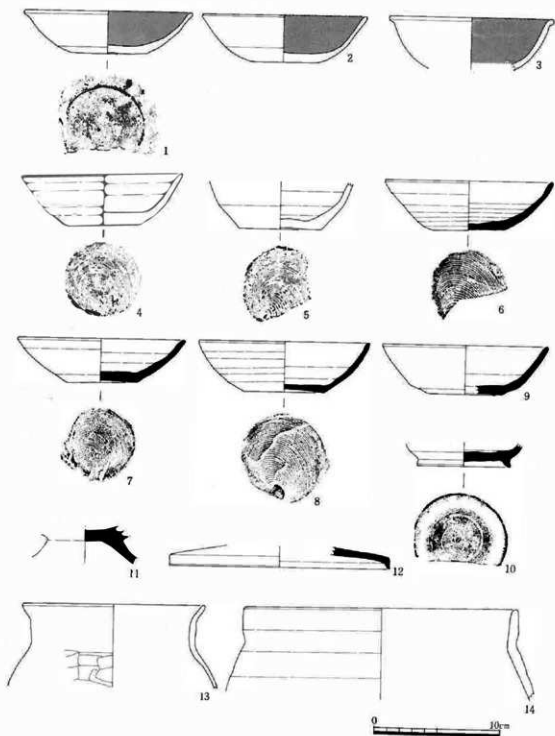
III-42 6号住居址



III-43 6号住居址実測図

第1次住居の中央付近に構築されていたと考えられる。ともあれカマドは東壁にあり、やや突出して構築されていたが、調査時には既に破壊を受け焼土と土師器坏・變片を残すのみであった。

遺物(III-44) 遺物の出土量は多い。カマド及びその周辺と南壁沿いに多く認められた。宍形のものはないものの他の住居址に比べ残存部が大きい。器種には土師器坏(1~5)・變(13・14)、須恵器坏(6~9)・高台付坏(10)・蓋(12)・高台付盤(11)・變・細口壺がある。1の外面はロクロナデされた後に底部外縁を1周のヘラ削りを施す。底部外面もこの前に回転ヘラ削り調整がなされる。内面は縦方向の軽いヘラ磨きが施され、黒色処理される。口径13.1cm・器高3.4cm。2も1と同様であるが、内面のヘラ磨きははていぬいである。口径12.8cm・底径5.1cm・器高3.4cm。3の体部は椀形をなし、口縁端部は短く外反する器形になる。内面は軽く雑なヘラ磨きがなされた後に黒色処理される。口径13.0cm。4は内外面ともロクロ調整によっており、底部外面に回転糸切り痕を残す。内面の底部付近は赤色顔料が付着している。6~9の底部はいずれも回転糸切り痕を残している。6~8は内外面ともロクロ調整痕が比較的顕著である。6は口径13.4cm・底径6.0cm・器高3.9cm、7は口径13.0cm・底径5.5cm・器高3.5cm、8は口径13.6cm・底径6.5cm・器高4.0cm、9は口径13.2cm・底径6.2cm・器高3.9cmをそれぞれ測る。10の底部は回転ヘラ削りで調整され、断面三角形の高台を外縁に貼付している。底径7.4cm、11の高台付盤は奈良時代に比



III-44 6号住居址出土陶器

定されるもので、まぎれ込みであろうか。12の蓋は平坦な天井部から口縁部が直立する器形になる。口径17.6cm。5は小形の甕で内外面ともロクロナデされ調整痕をそのまま残す。底部の切り直しは回転糸切りによる。底径6.5cm。13は中形の甕である。頸部が直立し、口縁部が短く外開する特色を有する。外面は横方向に強くロクロナデ調整した後に体部に横方向のヘラ削りを施している。内面はロクロナデである。口径14.2cm。14の口縁部は有稜状になって直立する。内外面ともロクロナデ調整されているが、内面にはその後縦ハケが用られる。口径21.4cm。

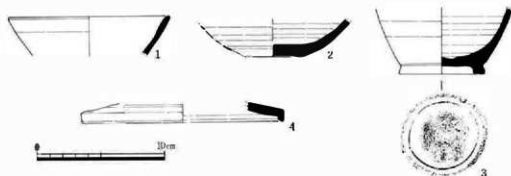
7号住居址

遺構 (III-20・45) Ⅲ区中央付近に位置し、8号住居址を切って構築されるが、9号井戸址に北西隅を掘り込まれる。形態は隅丸方形を呈するものと思われる。東西間の規模は2.65mを測る。掘り込みは北壁33cm・東壁32cm・西壁25cmになるが、床面は平坦で軟弱である。カマド・柱穴等の施設は認められなかった。

遺物 (III-46) 出土量は多くなく、器種に土師器埴・甕、須恵器埴(1・2)・長頸瓶(3)・釜(4)・甕がある。1・2はともにロクロ調整痕を明瞭に残している。2は完全に還元炎焼成されており底部付近を除いて他は暗褐色を呈する。底部には回転糸切り痕を残す。1の口径は12.6



III-45 7号(下)・8号(左下)・9号(右下)住居址、
21号土塙、9号井戸址



III-46 7号住居址出土土器実測図

cm、2の底径は4.8cmである。3は長頸瓶の体部下半片と思われる。内外面ともにいいいなクロ調整が施される。底部外面に回転糸切り痕を残し、外縁に台形状の高台が貼付される。底径6.6cm。4は内外面ともに自然釉が付着する。口径16.0cm。

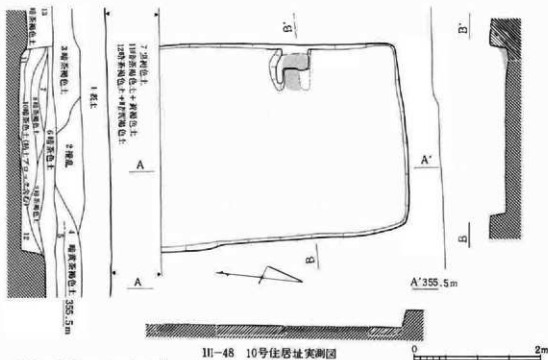
10号住居址

遺構(III-47・48) III区の西側にあり、11号住居址の東壁を切り込んで構築されている。形態は主軸の短い長方形を呈する。主軸方位はN-95°-Eである。住居址は暗茶褐色粘質土層から掘り込まれ、土層断面から西壁52cm・東壁40cmを測る。床面は南にやや上がり軟弱である。カマドは西壁のやや中央より北側に構築されているが、調査時では既に破壊を受けており粘土製両袖形の左袖部付近を検出した。壁から袖部上面まで60cmを測る。火床は幾分凹み、焼土塊状を呈していた。柱穴は認められなかった。

遺物(III-49・50) 出土量は多く、主としてカマド周辺から検出された。器種には土師器坏

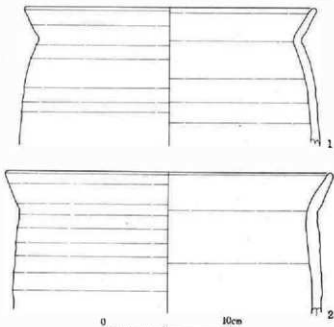


III-47 10号住居址



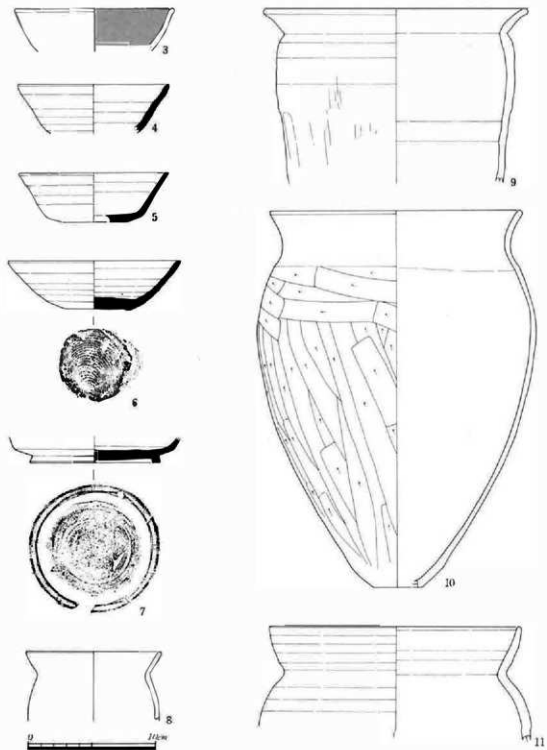
III-48 10号住居址実測図

(3)・甕(1・2・8-11)、
 須恵器坏(4-6)・高台付坏
 (7)・蓋・甕があるが全て破片
 出土である。3の外はクロコ
 ナデされ、内面は雑なヘラ磨き
 調整後に黒色処理される。口径
 12.4cm。4-6はいずれもクロ
 コ調整痕を顕著に残す。5の底
 部外面は回転ヘラ削りがなされ
 る。6は完全な還元焰焼成にな
 らず底部付近を除いては橙褐色
 を呈し、また底部外面には回転
 糸切り痕を残す。3は口径11.8
 cm、4は口径11.6cm・底径5.2
 cm・器高3.9cm、6は口径13.4
 cm・底径5.4cm・器高3.9cmをそ



III-49 10号住居址出土土器実測図(1)

れぞれ測る。7も4と同様酸化焰焼成により橙褐色を呈する。坏部は内外面ともにクロコナデされ、底部外面は回転ヘラ削りが施されて後に台形状の高台が貼付される。8は小形の甕で口縁



III-50 10号住居址出土土器实例图(2)

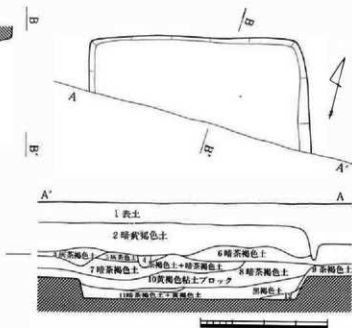
部は頸部からくの字状に外反し、体部はやや丸味を有する。内外面ともにロクロナデされる。口径10.2cm。9は最大径が口縁端部にある長胴の甕で、口縁部は頸部から強くくびれて外反し、体部は肩部に幾分張りのあるものの以下直線的に底部に至る形態になる。口縁部から体部上半にかけて強いロクロナデが行われ、その後体部には縦方向のへら削りが施される。内面はヨコナデ調整である。口径20.6cm。10はいわゆる武蔵型の甕である。口縁部はゆるくくの字状に立ち上がり気味に外反し、体部上半に最大径を有し、体部が倒卵形を呈する器形になる。体部外面の調整は、中位から下位にかけて下から上に向かってへら削りが行われ、上位には横方向のへら削りが施される。内面は全体的にナデ調整である。口径19.8cm・底径3.9cm・器高29.9cm。11の口縁部は頸部からくの字状に強くくびれた後に内湾気味に立ち上がる。体部はやや張り出し、外面はロクロ調整痕を顕著に残している。口径19.6cm。1は口縁部が頸部より短く、くの字状に外反し、2にはこの外反度が弱い。ともに外面にはロクロ痕を顕著に残し、内面は雑なナデ調整が施される。10の口径23.0cm・11は25.5cmである。

12号住居址

遺構(III-51-53) III区の西側に位置する。調査では住居址北側三分の一程検出したにすぎなく大部分は調査区域外にある。形態は一辺3.30cm程の規模で方形を呈するものと思われる。南北軸方位はN-15°-Wを指す。掘り込みは土層断面から東壁40cm・西壁32cmを測るが、床面は傾斜がなく平世で軟弱である。

調査範囲内ではカマド等の施設は認められない。

遺物 出土遺物は3点にすぎない。土器器壁片及び須恵器坏片であり、それも図上復元できない程の小さい破片である。



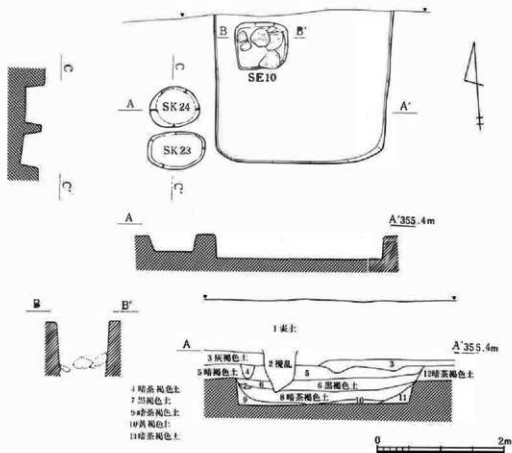
III-51 12号住居址実測図



III-52 12号住居址、23号・24号土坑



III-53 12号・13号住居址、23号・24号土坑、10号井戸址、ピット群



III-54 13号住居址、23号・24号土坑、10号井戸址実測図

13号住居址

遺構 (III-53・54) III区西側の12号住居址の北側に隣接する。形態は北壁付近が調査区域外に伸びているため定かでないが、一辺2.80m程の隅丸方形になるものと思われる。掘り込みは土層断面から東壁35cm・西壁38cmを測る。底面はおおむね平坦で軟弱である。カマド・柱穴等の施設は確認できなかった。

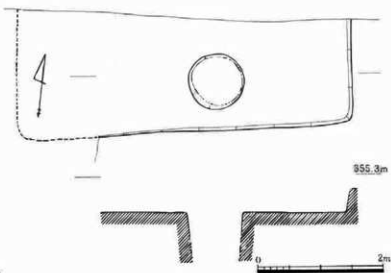
遺物 この住居址から出土した土器は土師器内黒環2点・甕1点の小破片にすぎない。

15号住居址

遺構 (III-25・55) III区の西端にあり、14号住居址と重複し、12号住居址を内包する。また住

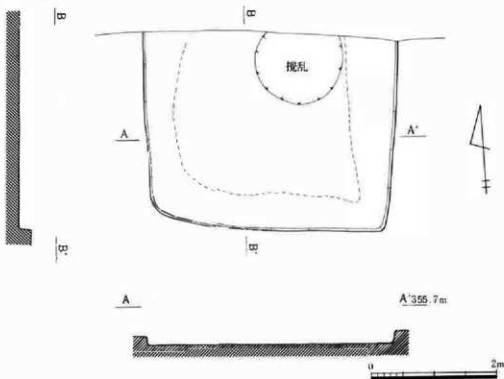
居址の北半分以上は調査区域外になる。形態は一边5.50m程の方形を呈するものと思われる。掘り込みは南壁・東壁とも38cmを測るが、西壁は土層断面から42cmになる。底面は平坦で軟弱である。調査地内からカマド・柱穴等の施設は認められなかった。

遺物 出土量は少量で、それも図上復元できるものはない。器種に土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕がある。

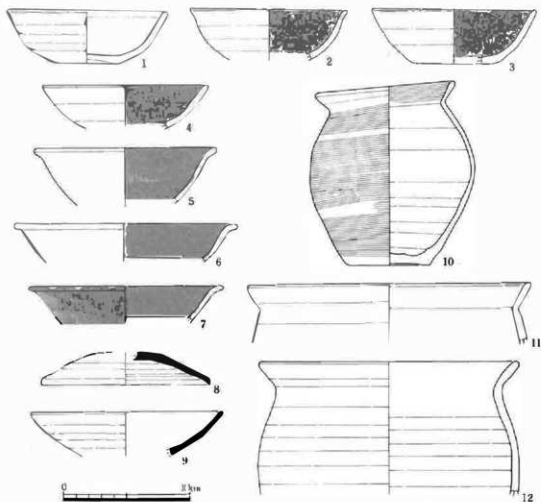


III-55 15号住居址、12号井戸址実測図

17号住居址



III-56 17号住居址実測図



III-57 17号住居址出土土器実測図

遺構(III-56) III区の中央より東側にあり、北壁付近は調査区域外へ延びる。また近世以降の円形擾亂を内包する。覆土は黒褐色粘質土で炭化物を多く含んでいる。形態は方形を呈するものと思われ、東西間の距離は3.80mを測る。掘り込みは南壁17cm・東壁19cm・西壁5cmになるが、床面は平坦である。尚実測図中の鎮線内は良く踏み堅められていた。カマドは調査地内からは確認されなかった。

遺物(III-57) 出土量は比較的多いが完形のものはない。器種には土師器杯(1~6)・高台付杯(7)・甕(11・12)、須恵器杯(9)・高台付杯・蓋(8)・甕がある。1の外面はロクロナデされ、底部は回転糸切りである。内面は雑なへら磨きが施される。口径12.6cm・底径5.2cm・器高4.2cm。2~6は内面が黒色処理され、7は全面黒色処理が施される。2は口縁部が若干反する器形になる。内面のへら磨きは雑である。口径12.2cm。3の体部は内湾気味に立ち上がる。内面は

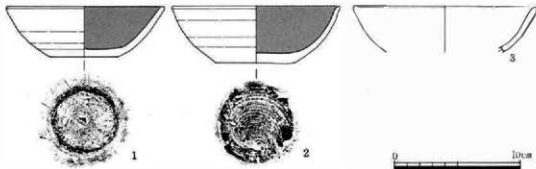
やはり雑なへら磨き調整である。底部外面には回転糸切り痕が残る。口径12.7cm・底径6.2cm・器高4.3cm。4の体部も内湾気味に立ち上がるが浅い。口径13.0cm。5・6は口縁部がやや長く外反し、坏身もさほど深くない器形が予想される。ともに外面はロクロ調整され、内面は雑なへら磨きで処理される。5の口径は14.1cm、6の口径17.1cmである。7は全面黒色処理されるが、この手の土器には珍しくへら磨きが雑である。尚底部に三角形状を呈した高台が貼付されるだろう。他にこの種の高台が1点出土している。口径15.2cm。8はつまみ部を欠く蓋で、完全な還元焙焼成がなされていない。口径13.4cm。9は体部が内湾しながら立ち上がる浅い坏である。口径15.0cm。10は小形の甕で口縁部は頸部からくの字状を呈し鋭く外開し、体部中位に最大径を有する器形になる。器壁は薄い。外面は口縁部がロクロナデされるほかは、体部の全面にわたって横方向の回転ハケナデが施され明瞭なカキ目を残す。内面は口縁部にカキ目を残し、体部はナデ整形される。また底部外面に回転糸切り痕がある。口径10.7cm・底径6.5cm・器高14.2cm。11は口縁部が頸部でくの字状に強くくびれ、内湾気味に立ち上がる形態をとる。口径22.0cm。12は口縁部が緩やかなくの字状の形態になる。口径20.0cm。11・12は内外面ともにロクロ調整痕を残す。

18号住居址

遺構 17号住居址の南側にあった住居址であるが、表土除去中そのほとんどを破壊してしまった。ただガス管の南側に焼土と炭化物層が確認され住居址として確認できた。また土層から東西間の規模・掘り込みをさぐったのであるが、不幸にもこの地点の下水道からの汚水のにじみ出しが著しく観察することができなかった。炭化物の広がりから3m以上の規模になるものと推定され、焼土・炭化物の厚さは2～3cmに及んでいた。

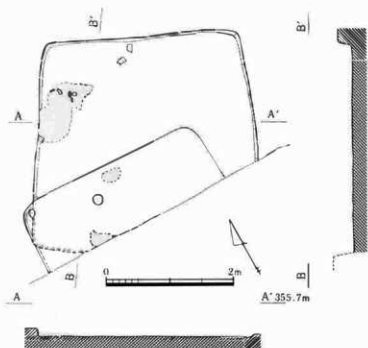
遺物 出土量は少なく、それも小破片で図上復元できるものはない。器種に土師器坏・甕・須恵器坏・蓋・甕がある。

19号住居址



III-58 19号住居址出土土器実測図

遺構(III-59-61) III区
 の東側に位置し21号住居址
 を切り込む。調査では北壁
 付近の3分の1程を検出し
 たにすぎず、他は南側調査
 区域外にある。形態は一辺
 3.40m程の隅丸方形を呈す
 るものと思われる。掘り込
 みは西壁で35cmを測る。床
 面は平坦で秋弱である。カ
 マドは北壁中央に設けられ
 た可能性があるが、焼土が
 床面よりやや浮いており火
 床がない点疑問である。



III-59 19号・21号住居址実測図



III-60 19号(左)・21号(右)住居址



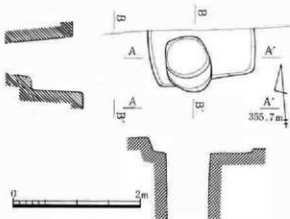
III-61 19号(上)・21号(下)住居址

遺物 (III-58) 出土量は少ないが、完形に近い土師器環が2個出土している。この他の器種に土師器甕(ロクロ調整)・須恵器杯・蓋・甕がある。1は体部がロクロナデされた後に底部外縁に一带の回転ヘラ削りが施される。同外面は回転ヘラ削り調整である。内面は比較的ていねいにヘラ磨きがなされ黒色処理される。口径12.2cm・器高4.0cm。2は完形である。外面はロクロナデ痕が残し、内面は横方向の後縦方向のヘラ磨きが施され黒色処理される。底部外面には回転系切り痕を残す。口径13.1cm・底部6.2cm・器高4.5cm。3は内外面ともにロクロ調整痕を残す。口径14.5cm。

20号住居址

遺構 (III-59-61) III区の東側にあり、北壁半分程は調査区域外に延びる。東西間の距離は1.07mしかなく、通状の住居址とは異なる性質のものかもしれない。掘り込みは南壁21cm・東壁22cm・西壁21cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマドは確認できなかった。尚、13号井戸址を内包している。

遺物 出土量は少なく、図上復元でき



III-62 20号住居址、13号井戸址実測図



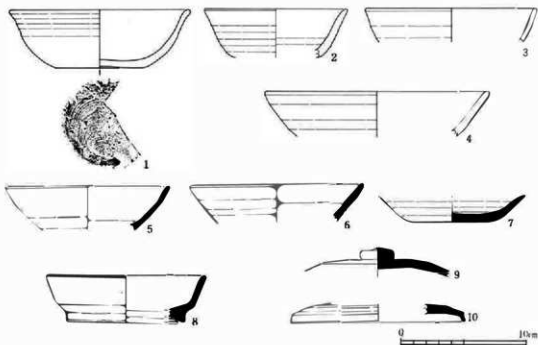
III-63 20号住居址、13号井戸址

るものはない。器種には土師器・甕、須恵器・甕がある。内耳土器も出土しているが、13号井戸址に伴うものであろう。

21号住居址

遺構(II-59~61) III区の東側にあり、19号住居址と重複する。形態は不整形を呈し、主軸(東西)が3.00m、南北軸3.20mの規模になる。主軸方向はN-57°-Wである。掘り込みは北壁22cm・東壁16cm・西壁37cmを測るが、床面は水平に近く軟弱である。カマドは西壁中央付近にあったものと思われ、厚い焼土の堆積が認められるがカマドの形態は不明である。柱穴は認められなかった。

遺物(III-64) 出土量は比較的多い。焼土内より甕片が多く出土したが因上復元することができなかった。器種には土師器・甕(1~4)・甕、須恵器・高台付甕(8)・蓋がある。1は外面がロクロナデされ、底部に回転糸切り痕が残る。内面はていねいにへら磨きが施される。口径14.0cm・底径7.0cm・器高4.6cm。2の体部調整はロクロナデである。口径11.2cm。3は口縁部外面と内面全体にていねいなへら磨きが認められる。口径13.6cm。4の内面は軽いへら磨きになる。口径17.6cm。5の体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は肥厚する。内外面ともロクロ調整である。口径12.8cm。6の体部は直に立ち上がり、甕身の低い器形になるであろう。口径13.6cm。7の底部外面は静止へら削りされ部分的にナデ整形される。底径7.4cm。8は体部と底部の接点は鈍い稜をなし、体部が短く直線的に立ち上がる器形で、角高台が貼付される。口径12.4cm・底径



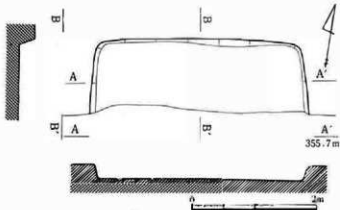
III-64 21号住居址出土土器実測図

9.2cm・器高3.7cm。8は偏平疑宝珠形をつまみを有する。9は残存天井部が平坦で口縁部が嘴状を呈する。口径13.8cm。尚、8・9の天井部調整は回転ヘラ削りである。

22号住居址

遺構 (III-65) III区の東側にある。調査では北壁側3分の1程検出したにすぎない。未検出部分は両側調査区域外にある。形態は一辺3.30mの方形を呈するものと思われる。南北軸方向はN-7°-Eである。掘り込みは北壁23cm・東壁24cm・西壁24cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマド・柱穴等は認められない。

遺物 出土量は多くなく、それも図上復元不可能な小破片である。器種には土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。尚、須恵器杯の底部にはヘラ削りが認められ前代の所産であろう。



III-65 22号住居址実測図

1号溝址

遺構 (III-34-35) I区の2

号住居址の南壁より掘り込まれ、ほぼ南北方向へ直線に延びる浅いU字形の溝である。検出面での最大幅2.0m、溝底幅は1.2~1.4m、深さ25cmを測る。

遺物 この遺構に付属する遺物は少量で、土師器坏・甕、須恵器坏片が確認される。中世の遺物がないことから該期の溝址と考えている。用途は不明である。

4号溝址

遺構 (III-34・66) II区の北端近くにあり、奈良時代の3号溝址を切り、5号溝址と並走する。北西から南東方向へ直線的に延び、断面が逆台形状を呈する。確認された範囲での長さは約4.3m、最大幅1.25m、最小幅0.95m、溝底の平均幅0.55m、深さ約0.65mを測る。

遺物 弥生時代後期の甕・壺片が出土している他、該期の土師器坏片が得られただけである。

6号溝址



III-66 4号溝址

遺構(III-67) III区の中央にあり、北端は井戸により擾乱を受ける。断面は逆台形を呈し、溝底面の傾斜は南から北である。確認された範囲での長さは約2.9m、幅0.95m、溝底幅0.6m前後、深さは平均40cm程になる。

遺物 弥生時代後期の壺片と該期の土師器坏・須恵器壺片を得ただけで、中世の遺物はない。

7号溝址

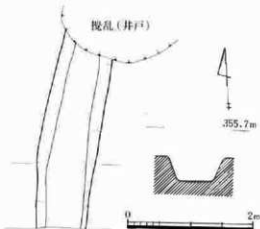
遺構(III-68) III区の中央付近にあり、16号住居の東壁を破壊して掘り込んでいるが、北側は26号・27号土塼により切り込まれる。断面は逆台形状を呈し、溝底面は南から北へ傾斜する。確認された範囲での長さは約4.2m、幅の平均1.3m、溝底幅1.1m前後、深さ40cmを測る。

遺物 土師器坏・壺片を得ただけで、他の時期のものはない。

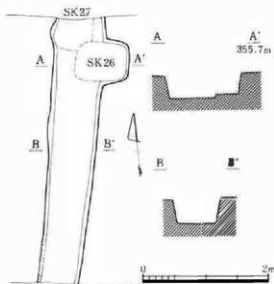
1号土塼

遺構(III-7・70) I区1号住居の床面を掘り込んでつくられている。東西0.95m・南北0.85mの不整形形を呈し、床面からの深さは9cmである。遺物は底面より5cm程浮いた状態で出土した。

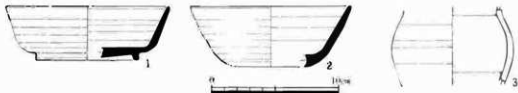
遺物(III-69) 1は須恵器の高台付坏である。坏部は直線的で、薄手でクロロ調整もていかに仕上げている。底部外面には回転ヘラ削りが施される。口径12.7cm・底径8.2cm・器高4.3cm。



III-67 6号溝址実測図



III-68 7号溝址、26号・27号土塼実測図



III-69 1号土塼出土土器実測図



III-70 1号土坑

2は須恵器坏である。内外面ともロクロナデされ、底部に回転糸切り痕を残す。また外面に火だすき痕が認められる。口径12.5cm・底径6.2cm・器高4.8cm。3は土師器の小形甕で、内外面ともいっしょにロクロナデされる。

3号土坑

遺構(III-71・73) II区の北側に位置し、4号土坑を切り込んでいる。掘り込みは2段になるが、上面形態は径1.0mの円形を呈する。深さは48cmである。

遺物 土師器表、須恵器坏片が各1点出土しているにすぎない。

9号土坑

遺構(III-72・73) I区の中央付近の土坑群の中にある。形態は径0.95mの円形を呈し、深さ51cmを測る。

遺物 須恵器台付坏・蓋・甕片が出土しているにすぎない。



III-71 3号(右)・4号(左)土壇、2号井戸址(上)

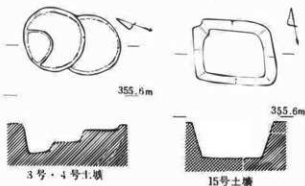


III-72 I区土壇・井戸址群

15号土塙

遺構 (III-73-75) II区中央付近の土塙群内の一つである。形態は東西1.3m、南北1.1mを測る不整隅丸長方形を呈する。深さは53cmである。

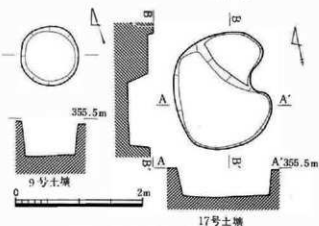
遺物 土師器甕、須恵器坏・蓋片、安山岩製磨石で外縁に打痕のある凹石 (II-103-2) が出土している。



16号土塙

遺構 (III-74-76) II区中央付近の土塙群内の一つである。形態は楕円形を呈し、長軸0.95m・東西0.75m・深さ60cmの規模になる。

遺物 (III-74) 深緑色を呈する自然のかかった須恵器の大きな破片2点と土師器甕片が出土している。このほかに支脚状の土製品が1個出土している。これはハの字状に開く脚部に浅い四形の受部がつく形態である。全体に横方向の雑なナデ調整が施されている。受部径7.7cm・底部径8.3cm・器高6.4cmの大きさである。

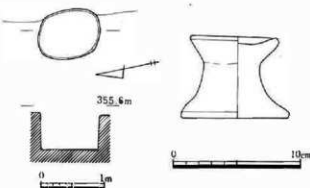


III-73 平安時代土塙実測図

17号土塙

遺構 (III-73-76) II区の土塙群内の一つである。形態は不整(凹)形を呈し、掘り込みは2段になる。南北1.85m・東西1.50mの最大幅で、深い掘り込みは検出面から40cmになる。

遺物 弥生時代後期の壺片のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕片が出土している。



III-74 16号土塙・出土土製品実測図



III-75 II区土壇群(北より)



III-76 II区土壇群(南より)

20号土壇

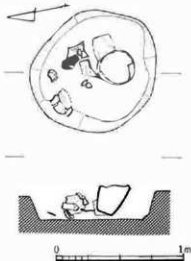
遺構 (I-77・78) II区の最も南にある。形態は不整円形を呈し、径1 m前後、深さ40cmの規模になる。底面より3 cm程浮き、やや南に傾いた状態で四耳壺が検出された。ただ頸部以上はもとより欠損していたのであるか、上面の肩部付近は表土除去中破損を受けそのまま行方不明になってしまった。またこの土器を支えるように東側に接して角礎が認められた。そして周辺には土器片が散在しており、この四耳壺を蔵骨器として認定されるならば、上部を蓋として覆っていた



III-77 20号土壙

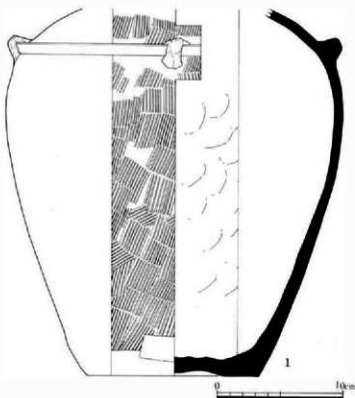
土器片が落下してこのような状態となったと考えられなくもない。それにしても埋没状態が深すぎるきらいもある。

遺物(III-79・80) 1は須恵器の四耳壺である。肩部に断面三角形を呈する一周の凸帯をめぐるし、その上に等間隔に4個の粘土紐の耳を貼付する。頸部より上は欠損していた。体部の外面は平行タタキ目が残り、底部付近はへら削りか施される。内面は指頭瓦痕が認められるが最終調整はナデによっている。尚この土器内より人骨と思われる小破片を検出した。蔵骨器として使用されたものであろう。底径13.5cm・残存器高29.2cm。2~4は土師器坏である。2は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部に至って幾分肥厚し外反する器形になる。口径は13.9cm。3の底部外面は回転糸切りの後にナデにより調整される。底径6.5cm。4



III-78 20号土壙実測図

は内面ともにへら磨きが施され
 黒色処理された高台付皿形の坏
 である。口径13.4cm、5・6は
 土師器甕である。共に図上復元
 した部位の2分の1以下の破片
 出土である。体部上反及び口縁
 部はロクロナデが行われ、その
 痕跡を顕著にとどめる。そして
 中位から以下は下から上へへら
 削りが施される。内面の調整は
 横ナデによっているが、6には
 更にハケナデが用いられる。6
 の口径は22.0cm・現存器高20.2
 cm、7は口径24.1cm・現存器高
 18.0cmである。



23号土壙

遺構(Ⅲ-52-54) Ⅲ区の西
 側にあり、13号住居に隣接す
 る。形態は不整楕円形を呈し、
 東西0.9m・南北0.6m・深さ30cmの規模である。

Ⅲ-79 20号土壙出土四耳甕実測図

遺物 土師器坏、須恵器甕片が出土しているにすぎない。

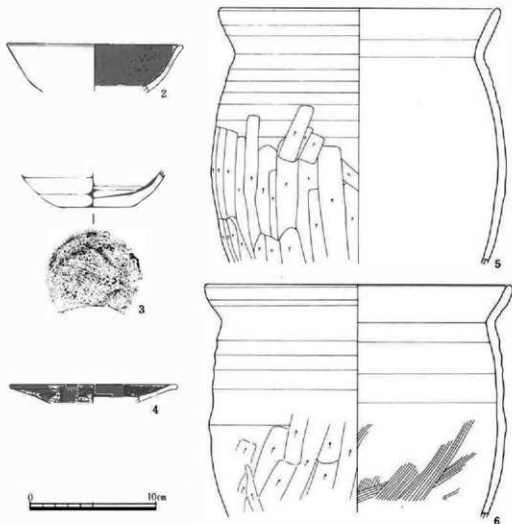
26号土壙

遺構(Ⅲ-6a) Ⅲ区の中央東側にあり、7号溝址・27号土壙を切り込んでつくられている。形
 態は隅丸長方形を呈し、東西0.9m・南北0.65m・深さ33cmの規模である。

遺物 弥生時代後期の高坏片が見られるほか土師器甕、須恵器坏・蓋・甕片が出土しているに
 すぎなく、図上復元できるものもない。

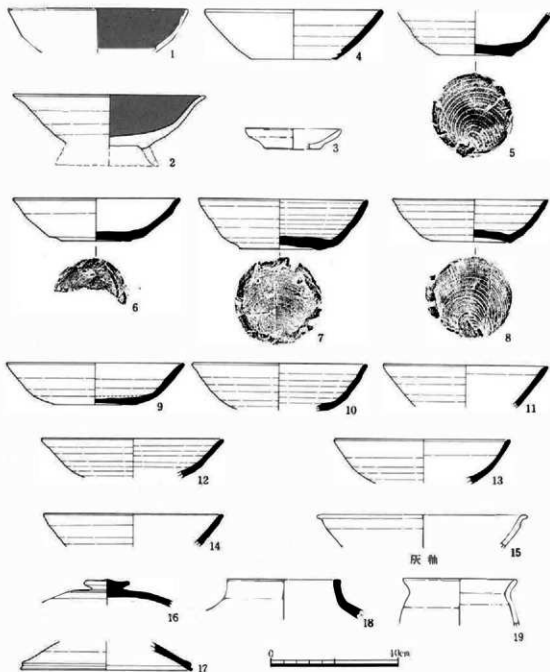
遺構外出土の土器(Ⅲ-81)

ここでは、平安時代以前の遺構に伴うものと、検出面から採集した土器を取り扱う。それ故、
 中世の遺構から出土し図上復元可能なものについては、その遺構の項で記載することにする。ま
 た石製品等についても時期不明のものが多いため別記する。



III-80 20号土橋出土土器実測図

1・2は土師器坏である。1は体部が湾曲し、口縁部が外開気味になり、恐らく高台が貼付される器形になるであろう。外面はロクロナデ調整痕を残しているが、内面は口縁部が横方向の、他は縦方向のヘラ磨きが施され黒色処理される。口径14.0cm。2にも高台が貼付され、その痕跡をとどめる。底部外面は回転糸切り痕を残し、底面は雑なヘラ磨きの後に黒色処理される。口径15.0cm。3は中世のいわゆるカワラケである。5～14は須恵器坏である。5～8の底部には回転糸切り痕が認められ、5は完全な還元焰焼成にならず橙褐色を呈する。6の内面と11・14の外面に火だすきがあり、10の外面に自然釉が付着している。9の底部外面はナデ調整である。5の底径6.2cm・6の口径12.9cm・底径5.5cm・器高3.4cm。7の口径13.2cm・底径6.6cm・器高4.0cm。8の口径12.3cm・底径6.2cm・器高3.3cm。9の口径13.8cm・底径6.5cm・器高3.3cm。10の口径13.5cm。11の口径13.0cm。12の口径14.1cm。13の口径13.9cm。14の口径14.0cm。15は灰釉陶器の破片であ



III-81 検出面出土土器実測図

る。口縁端部は短く外反し丸味をもって終わる。口径16.2cm。灰軸陶器の出土量は少なくわずかに数点認められる程度である。16・17は須恵器蓋である。16には偏平擬宝珠形つまみを付し、天井部が丸味をもって口縁部に至る。17の口縁部は凹みを有するもの喙状形態をとらない特異な

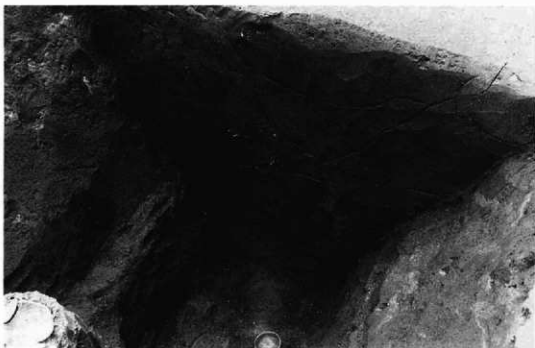
器形である。口径13.5cm・18は須恵器短頸壺で、口縁部はやや内傾気味に短く立ち上がり、口唇部が面取りされる。口径8.9cm、20は土師器の小型甕で口縁部がやや短く短くくの字形に外反する形態になる。内外面は比較的ていどにロクロナデが施されている。口径9.0cm。

第6節 中世以降の遺構と遺物

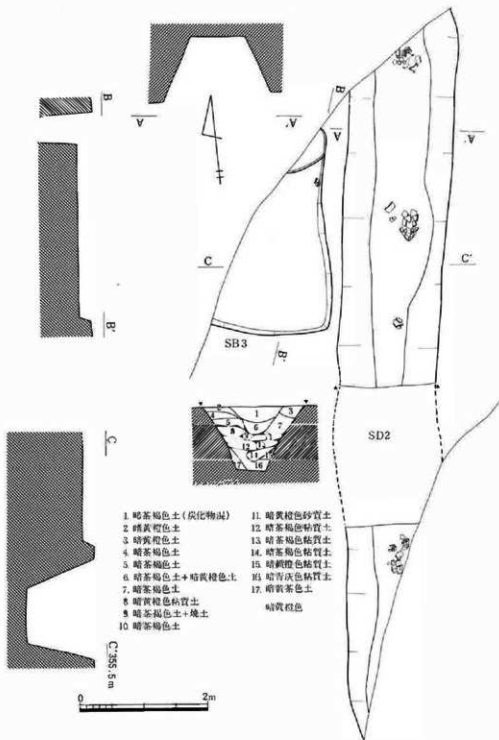
遺構は当該期の遺物の出土をもって年代を比定した。確認又は検出した遺構は、溝址2ヶ所・井戸址20基、土塀5基にすぎない。遺物は少量ながら各調査区全体に認められた。尚、前節でも触れたが井戸址においては形態等にそれ程の相違が認められないので、本節で取り扱う。実測図の断面及び深さの数値は確認面まで深さを示す。また近世及び現代に至る井戸址と思われるものも若干存在したが、表土除去の際上部遺構を掘削してしまったため本報告書では取り扱わない。また土器類は土師製の小形の皿をカワラケ、粘土が砂質のものを内耳土器と呼称した。

2号溝址

遺構（III-37・82・83） II区の北側にあり、南北方向へ直線的に延びる溝である。確認された範囲での長さは10.30m・幅平均1.70m、溝底幅最大1.0m、同最小0.45mをそれぞれ測る。底面の傾斜は地形にそって南から北へ傾き、掘り込みは緩やかで断面形態は逆台形状になる。覆土上



III-82 2号溝址



III-83 3号住居址、2号沟址平面图

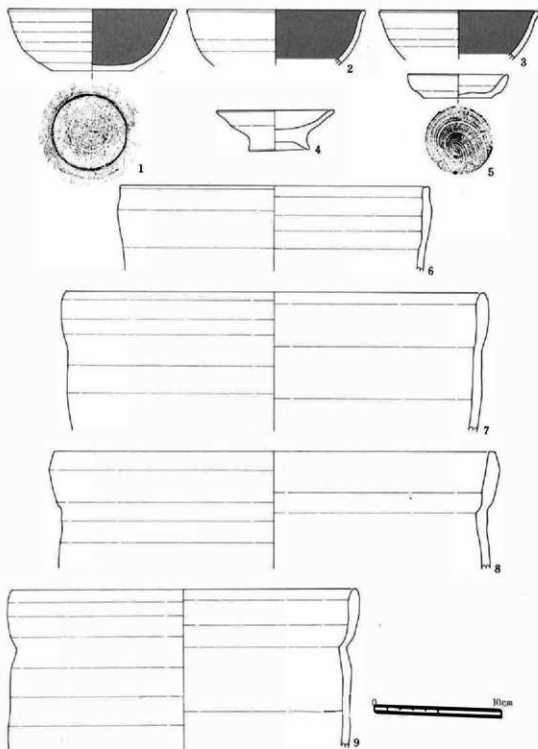
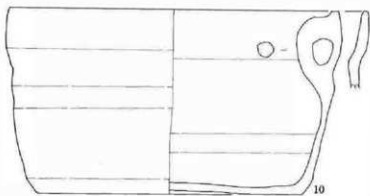
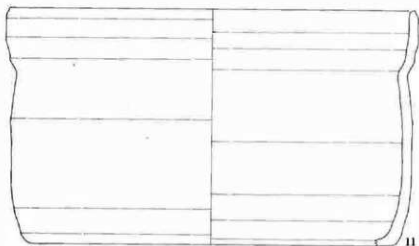


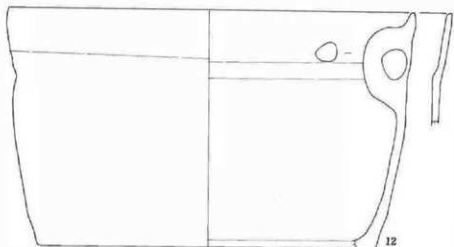
图-84 2号遗址出土土器实例图(1)



10



11



12



III-85 2号沟址出土土器夹刻图(2)

層より内耳土器がほぼ同一レベルで出土している。溝址の掘り込まれた時期は、この土器より古く、平安時代まで遡る可能性もある。尚底面より土師器杯(III-84-1)が出土している。

遺物(III-84-86) 平安時代の土師器杯(1-3)、カワラケ皿(5)、

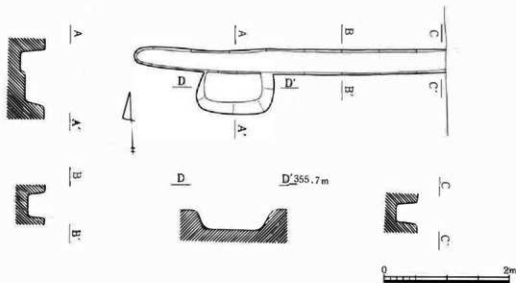


III-86 2号溝址出土土器実測図(3)

台付皿(4)、内耳土器(6-13)があり、軽石製小石罎(III-103-4)が出土している。1は外面ロクロナデの後底部外面及び外縁に回転ヘラ削りが施される。内面は比較的ていねいにヘラ磨きが行なわれ黒色処理される。ほぼ完形で口径13.2cm・底径6.3cm・器高4.9cmである。2・3も外面はロクロナデされ、内面はヘラ磨きされた後に黒色処理される。2の口径は13.8cm、3は12.2cmである。4は断面三角形の高台が貼付され内外面ともロクロナデされた後ナデられる。5も4と同様の手法により調整されるが底部外面に回転糸切り痕を残す。4・5も完形で、4は口径9.0cm・底径4.6cm・器高3.2cm、5は口径7.7cm・底径5.5cm・器高1.9cmである。6-12はいずれも内耳土器である。6-9・11・13の破片には内耳部が接合しなかったため図示していない。これらは口縁部の形態差から大きく2つに分けられる。6・7は口縁部が頸部で鋭くくびれることなく直線的に立ち上がる形態を呈する。ともに内外面とロクロナデされ、口唇部は面取りされる。6は口縁部が強くロクロナデされるため体部との間に段をなし頸部内面に緩やかな稜を形成するが、7の稜は不明瞭である。6は口径24.4cm、7は33.2cmである。8-12はいずれも口縁部と頸部でくの字状に短く屈曲し、頸部内面に鋭い稜を形成し、その後内湾気味に立ち上がる形態を呈する。底面は薄く仕上げ、10・12は上げ底になる。調整方法は前者と同様である。8は口径34.0cm、9は24.4cmである。10・12はほぼ完形に近く、10は口径26.2cm・底径20.8cm・器高14.6cm、12は口径32.3cm、底径27cm・器高18.9cmを測る。11は全体の8分の1程残存し、口径32.2cm・底径29.6cm・器高18.7cmになる。13は口縁部付近が欠損している。底径27.1cm。

8号溝址

遺構(III-87-89) III区の東側に位置し、33号土塙を切り込んで掘られ、溝底が西から東へ傾斜するU字状溝である。確認された範囲での長さは4.95m・幅平均0.4m・溝底幅30-35cm・深さ25-30cmである。



III-87 8号溝址、33号土壌実測区

遺物 出土量は少ないが、平安時代の土師器環・甕、須恵器環・高台付環・甕及びカワラケ・内耳土器の各小破片が出土している。

18号土壌

遺構 (III-76-94) II区中央の土壌群の一つであるが、本土壌だけが中世に比定される土器が出土している。一辺0.8m程の不整形を呈し、深さは35cmを測る。

遺物 出土遺物は土師器甕、須恵器環、カワラケ、内耳土器の各小破片があるにすぎない。

21号土壌

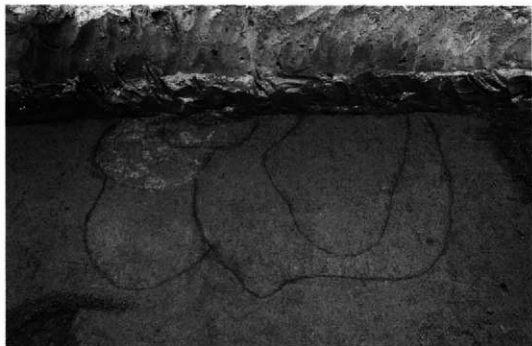
遺構 (III-20-45) III区の中央にあり、8号住居址の床面を掘り込み、9号井戸址により北東隅が破壊される。一辺0.7mの方形を呈し、検出面からの深さは46cmを測る。

遺物 出土遺物は土師器環・甕、須恵器環、内耳土器の各小破片であるにすぎない。

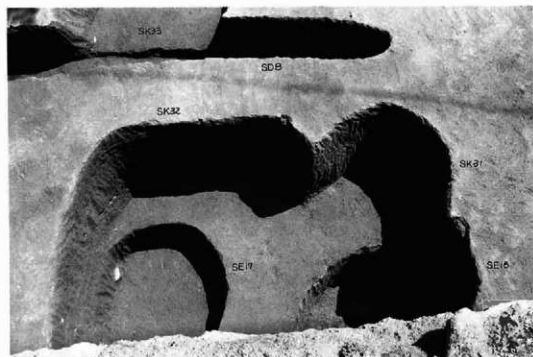
28号土壌

遺構(III-94) III区の中央東よりから検出された。長軸がN-80°-W方向をとる隅九長方形の土壌で、長軸1.75m・短軸(幅)0.6m・深さ28cmを測る。覆土は他のものが黒褐色粘質土になるのに、この土壌は灰褐色砂質土であった。墓塚の可能性があったので慎重に調査したが、人骨等確認できなかった。

遺物 覆土中より須恵器高台付環・蓋・甕、カワラケ、内耳土器片が出土している。



III-88 31号·32号土墩、16号·17号井尸址



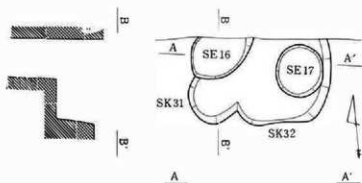
III-89 31号·32号土墩、16号·17号井尸址、8号溝址

31号土壇

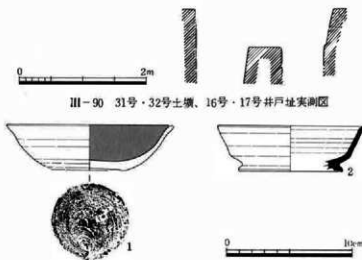
遺構(III-88-90) III区の東端にあり、互いに重複する中世遺構の中で最も古い。短軸幅0.9mの楕円形を呈するものと思われる。深さは57cmを測る。

遺物(III-91) 出土遺物は少ないが、器種に土師器(1)・甕、須恵器(2)・蓋・甕及び内耳土器がある。1は体部に丸味を有し、口縁部が外反する器形になる。体部外面はロクロナデによっており、内面はていねいなヘラ磨きが施され黒色処理される。底部外面に回転糸切り痕を残す。口径13.0cm・底径5.7cm・器

高3.6cm。2の体部は直線的に外開する。底部外縁に変形台形状の高台が貼付される。口径11.5cm・底径8.2cm・器高3.6cm。



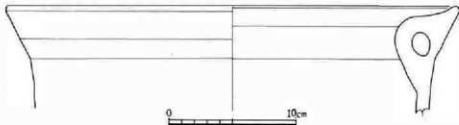
III-90 31号・32号土壇、16号・17号井戸址実測図



III-91 31号土壇出土土器実測図

32号土壇

遺構(III-88-90) III区の東端に位置する中世遺構群の一つで、31号土壇より新しく、16号・



III-92 32号土壇出土内耳土器実測図

17号井戸址より古い。東西約1.5mを短軸とする不整隅九方形を呈するものと思われる。深さは54cmを測る。

遺物(III-92) 出土遺物は少なく、図上復元できるものは内耳土器1点である。口縁部は頸部より内屈し、体部は直立した器形になる。また口縁部内面下方は幅の広い凹線状になる。内外面の調整はロクロナデによっている。口径は大きく35.6cmを測る。このほか火山弾裂石曹(III-103-3)が出土している。

1号井戸址

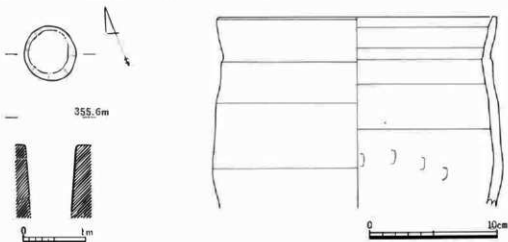
遺構(III-7) I区1号住居址の西にあり、ほとんどが調査区域外にある。形態は円形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。

遺物 器種に土師器坏、須恵器坏、灰釉陶器瓶があるが、図上復元が不可能な小破片である。

2号井戸址

遺構(III-71-93) I区の中央付近にある。形態は径0.85mの円形を呈する。深さは1.31mまで検出した。

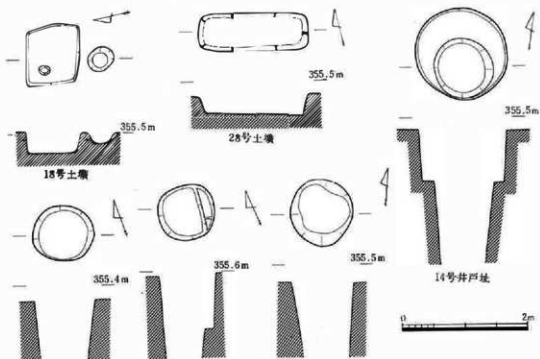
遺物(III-93) 図上復元が可能なものは土師器甕片1点だけである。甕は頸部の屈曲がほとん



III-93 2号井戸址・出土土器実測図

どなく、口縁部が直立し、肩部の張りがほとんどなく、最大径が体部中央付近にあるズボットした長胴形の器形にある。口唇部は面取りされ平坦になる。内外面ともにロクロナデで調整される。口径22.1cm。この他に内耳土器片が出土している。

3号井戸址



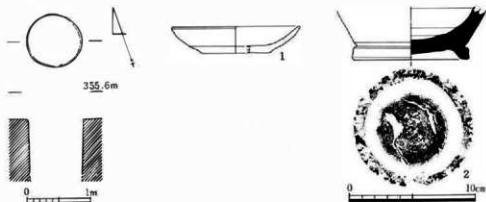
III-94 中世の土塹・井戸址実測図

遺構 (III-72-94) I区遺構群の中央付近にある。東西0.95m・南北0.85mの不整形円形を呈する。深さは95cmまで確認した。

遺物 出土量は少なく、カワラケ片・内耳土器片が出土しているにすぎない。

4号井戸址

遺構 (III-72-95) I区の遺構群中央付近にあり、3号井戸址の南にあたる。径0.9mの円形を呈し、深さ90cmまで確認した。



III-95 4号井戸址・出土土器実測図

遺物(III-95) 1はカワラケである。ロクロナデで仕上げられるが、その後底部付近は内外面ともナデられる。底部外面には回転糸切り底を残す。口径10.0cm・底径5.6cm・器高2.1cm。2は須恵器壺の底部付近の破片である。厚手の高台が貼付され、底部外面は回転ヘラ削りが施されている。また外面には自然釉の付着が顕著である。この地に内耳土器片、獣骨が出土している。

5号井戸址

遺構(III-72・94) 1区の中央より南側にあり、2号住居址の北にあたる。形態は上面で径0.9mの円形を呈するが、遺構西側の90cm程掘り下げたところに段を有し、径0.66mになる。深さ1.2mまで検出した。

遺物 弥生時代後期の壺片、平安時代の土師器甕片、須恵器高台付坏・甕各片が出土したが、中世に比定される遺物は出土していない。

6号井戸址

遺構(III-34・35) 1区の2号住居址西側の一部を切り込んで掘られている。形態は径0.9mの円形を呈する。0.78mの深さまで検出した。



遺物(III-96) この遺構からも中世に比定される遺物は出土し、III-96 6号井戸址出土土器実測図でない。図示したものは灰釉陶器破片である。体部下方外面ならびに底部は回転ヘラ削りされ丸味を有する。三ヶ月高台が貼付される。底径7.6cm。この他に弥生時代後期の甕片が2点出土しているだけである。

7号井戸址

遺構(III-37) II区2号溝址の西側にあり、3号住居址の東壁を切り込んでいる。そのほとんどが調査区にあるため、形態は円形を呈するであろうくらいしかわからない。深さは0.68mまで確認した。

遺物 土師器内黒坏・甕各片、内耳土器片が出土しているにすぎない。

8号井戸址

遺構(III-16-99) III区とII区の接合地点に位置し、5号住居址の床面を掘り抜いている。検出は南側半分だけであるが、深さ0.9mまで確認した。出土遺物はない。

9号井戸址

遺構(III-20-45) III区の中央部にあり、7号～9号住居址及び21号土壌を切り込んで掘られ

ている。形態は径1.1m程の不整形円形を呈する。深さは0.71mまで確認した。

遺物 内耳土器片が出土したにすぎない。

10号井戸址

遺構(Ⅲ-53・54) Ⅲ区の西側にあり、13号住居址の床面を掘り抜いている。形態は一辺0.8m程の方形を呈する。深さは0.7mまで確認した。遺物の出土はなかったが、上面には大きな石がはうり込まれていた。

11号井戸址

遺構(Ⅲ-94) Ⅲ区西側のピット群内にある。形態はほぼ1.05mの円形を呈する。深さ1.0mまで確認した。遺物の出土はなかった。

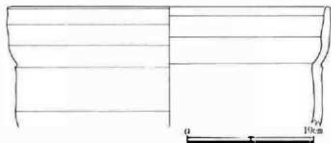
12号井戸址

遺構(Ⅲ-25・55) Ⅲ区西側の15号住居址の床面を掘り抜く。形態は0.9mの円形を呈する。深さ0.77mまで確認した。遺物の出土はなかった。

13号井戸址

遺構(Ⅲ-62・63)

Ⅲ区の東側にあり、20号住居址を切り込んでいる。上面形態は南北0.9m・東西0.7mの不整形円形を呈する。南側は深さ80cm程のところで段



Ⅲ-97 13号井戸址出土内耳土器実測図

を有し、下面は径0.66mの円形に近い形態になる。深さは1.07mまで確認した。

遺物(Ⅲ-97) 図示したものは内耳土器である。内耳の部分は欠損している。頸部で幾分屈曲するものの、体部及び口縁部は直立する器形になる。内外面ともロクロナデ調整で、口縁部にその痕跡を顕著に残す。口唇部は面取りされ平坦である。口径25.2cm。このほかに土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏、カワラケの各小破片が出土している。

14号井戸址

遺構(Ⅲ-94) Ⅲ区の西側にあり、この遺構も大きく、上・下2面ある。上・下面とも形態は

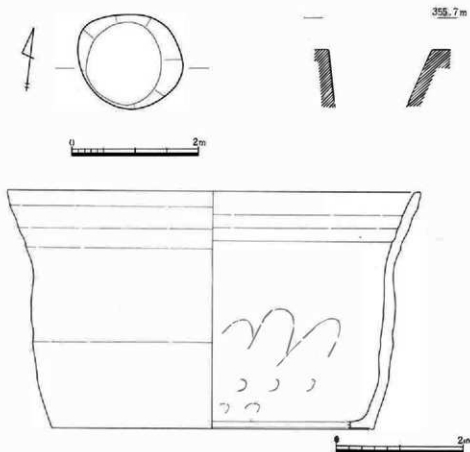
円形を呈し、上面の規矩は径1.5m、下厩は径0.94mを測る。深さ2.0mまで確認し、下層は水溜まりができた水位面に近いことをうかがわせる。

遺物 須恵器坏・高外付坏・甕、大形のかわラケ、内耳土器の各破片が出土している。

15号井戸址

遺構 (III-98) III区の東側に位置する。大形の遺構である。上面形態は東西1.75m・南北1.50mの不整形円形を呈する。掘り込みは傾斜を有しており、下部へ行く程形態は円形に近くなる。深さは0.7mまで確認した。

遺物 (III-98) 図示できるものは内耳土器1個である。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁部は緩やかにくの字状を呈して外反する。内外面ともロクロナデ調整される。底部は薄くつくられている。内耳部は欠損している。口径32.8cm・底径25.6cm・器高18.8cm。他の器種に弥生



III-98 15号井戸址・出土内耳土器実測図

時代後期高坏、土師器内黒坏・甕、須恵器坏がある。

16号井戸址

遺構 (II-88-90) II区東端の中世遺構群の一つで、31・32号土塙よりも新しい。形態は短軸0.8m程の不整形円形を呈する。深さ1.02mまで確認した。覆土は白褐色粘土を含んでおり、他の遺構と趣を異にする。このあり方は近世以降のものにも見られているので後世のものかもしれない。遺物の出土はなかった。

17号井戸址

遺構 (III-88-90) III区東端の中世遺構群の一つで、32号土塙内にある。形態は南北0.85m・東西0.75mの不整形円形を呈する。深さ0.89mまで確認した。遺物は32号土塙と混在してしまい、井戸址としての遺物は出土しなかった。

18号井戸址

遺構 (III-16-99) III区の中央にあり、5号住居址の床面を掘り抜いている。形態は径0.75m



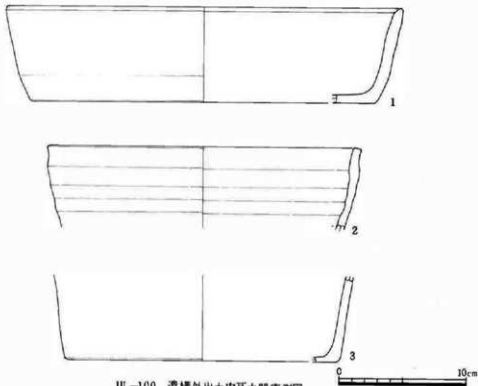
II-99 8号(下)・18号(上)井戸址

程の不整形形を呈する。内部には大小の自然礫が検出面からほうりこまれていた。5号住居址の床面から0.3mを確認した。

遺物 検出面からの遺物に内耳土器片がある。

遺構外出土の遺物 (III-100・101)

岡上復元できるものは、カワラケ (III-8-3) と内耳土器 (III-100-1~3) にすぎない。カワラケは内外面ともロクロナデされ、底部に回転糸切り痕を残す。口径7.6cm・底径4.4cm・器高1.7cm。内耳土器は内耳部が欠損しその形態は不明である。III-100-1は体部が直線的に外反しつつ立ち上がるが器高は低い。口径31.2cm・底径27.3cm・器高7.6cm。2は口縁部付近で若干内湾し、口唇部は面取りされる。また内外面ともにロクロ調整痕を顕著にとどめている。口径24.0cm。3は体部が底部より直線的に立ち上がる形態で、底部の厚さは2~3mmと薄い。底径21.8cm。このほか時期が判明するものに寛永通宝2枚 (III-101) がある。



III-100 遺構外出土内耳土器実測図



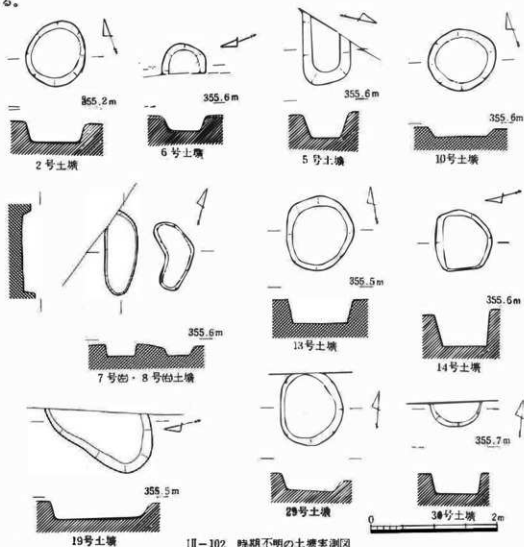
III-101 遺構外出土の寛永通宝拓影

第7節 時期不明の遺構と遺物

ここでは出土遺物が少なく、時期が明確に求められない遺構が検出面からの出土遺物で奈良時代以降のどの時期にもありそうなものをつかう。

23号住居址(?)

遺構 (III-26) III区の西端に位置し南壁の一部を検出したにすぎない。壁は直線にならず大きな円弧が重複しているような感がある。住居址かどうか疑問である。床面までの深さ32cmを測る。



III-102 時期不明の土坑実測図

2号土壇

遺構(Ⅲ-102) 1区の2号住居址の南にある。形態は最大径1.0m程の不整円形を呈する。深さは30cmを測る。

4号土壇

遺構(Ⅲ-71-73) 1区の中央付近に位置し、3号土壇によって切り込まれている。3号土壇は平安時代に比定されるので、この時期以前のものである。形態は径0.95mの円形を呈する。深さは8cmと浅い。

5号土壇

遺構(Ⅲ-72-102) 1区の中央付近にあるが、西側半分は調査区域外へ延びる。形態は南北(短辺)0.75mの隅丸長方形を呈する。深さは37cmである。

6号土壇

遺構(Ⅲ-72-102) 5号土壇の南に隣接し、やはり西側の一部は調査区域外にある。形態は0.7m程の円形を呈し、深さ24cmを測る。

7号土壇

遺構(Ⅲ-72-102) 7号土壇の東に隣接する。形態は南北1.1m・東西0.5mの半月形を呈する。深さは14cmである。

10号土壇

遺構(Ⅲ-72-102) 2号住居址の北側にある。形態は最大幅1.05mの不整円で、深さは18cmである。

11号土壇

遺構 10号土壇の南に隣接する。形態は円形を呈し、径0.94m・深さ5cmを測る。

12号土壇

遺構(Ⅲ-34-35) 2号住居址の床面を掘り込んでいる。形態は径0.85mの円形を呈し、検出面からの深さは48cmになる。

13号土壌

遺構 (III-76-102) II区中央付近にあり、土壌群内で最も北に位置する。形態は南北1.2m・東西1.05mの不整形を呈する。深さは40cmである。

14号土壌

遺構 (III-75-102) 13号土壌の南側にある。形態は最大幅90cmの不整形で、深さ40cmである。

19号土壌

遺構 (III-76-102) II区土壌群のうち南に位置し、東側半分は調査区域外にある。規模は不明であるが、他に比べ大きな長楕円形を呈するものと思われる。深さは27cmである。

22号土壌

遺構 (III-19-20) III区9号住居の床面を切り込んでいる。上面形態は南北0.9m・東西0.7mの不整形長方形になり、床面より10cmの深さのところで一辺50cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは63cmを測る。

24号土壌

遺構 (III-52-54) III区の西側にある。形態は最大幅0.8mの不整形で、深さ25cmを測る。

25号土壌

遺構 (III-26) III区の最西端の遺構であるが、北側の一部は調査区域外に延びる。形態は短軸(東西)0.5m程の楕円形を呈するものと思われる。深さは30cmである。

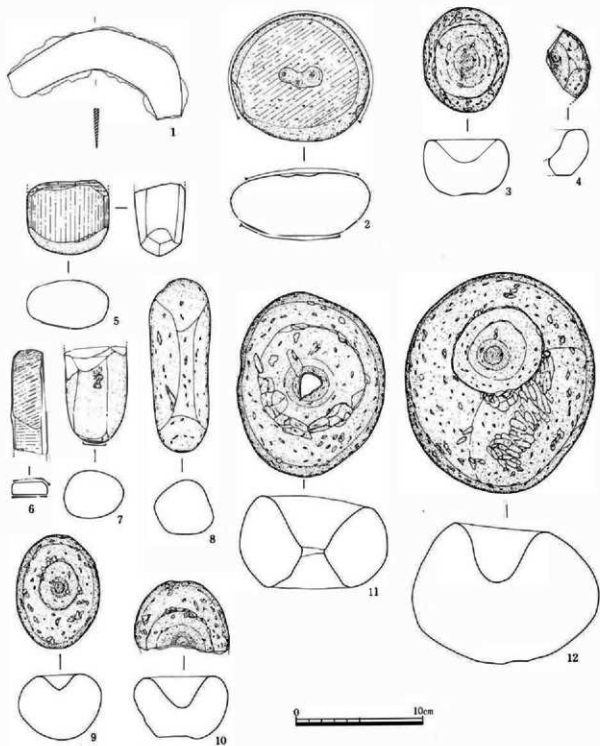
27号土壌

遺構 (III-68) III区中央付近の7号溝址にかかり、26号土壌に切り込まれるため規模等は不明である。形態は隅丸方形が予想される。

29号土壌

遺構 (III-102) III区の東側に位置する。形態は南北1.2m・東西1.0mの不整形を呈し、深さは29cmになる。

30号土壌



III-103 鉄製品・石製品実測図

遺構(III-182) 29号土壌の西側に隣接し、北半分は調査区域外にある。形態は径0.8m程の円形になるものと思われる。深さは32cmである。

33号土壌

遺構(III-89) II区東端の遺構で、8号溝址に北側を破壊される。長軸(東西)1.2mの不整隅丸方形の形態を呈す。深さは30cmである。

ピット群

遺構(III-25-53) III区の西側、13号住居址から14号住居址付近に散在する。径20~50cm代のものまでさまざま、深さも10~30cm代のものである。調査範囲内では統一性をもっていない。またこの検出面には他の遺構は確認できず、焼土等もなかった。

大溝址(?)

遺構(III-4) III区東側の14号・15号井戸址検出中に確認したもので、約45°の傾斜をもって北側へ落ち込んでいる。溝の規模等は不明であるが、ほぼ東西に流路をもつものと思われる。尚この溝址は、他の東端の遺構検出面からは確認できなかったので、上面の掘り込みはこれ以下ということになる。そうすれば平安時代以前にその年代が求められ、条里水田とのかかわりがあるものと推定される。

時期不明の遺物(III-103)

鉄製鎌(1)と石製品(5~12)がある。鎌は1号住居址上面より出土してのもので、着装部と先端部付近を欠損している。刃部は鋭利で曲刃である。5は弥生時代の石英閃緑岩製の太形蛤刃石斧の残欠を再利用している。刃部は敲打器に使用された後に磨石としている。6は定形の砥石で良く使用され薄い。7・8は安山岩製の敲打器で、先端と背面の一部に打痕がある。9~12は火山弾(安山岩)製の石倉である。10・11は両面が使用され、11は穴が貫通してしまっている。

第4章 結 語

調査地は、塩崎遺跡群の北側に位置するが、茶壺形灰陶器が単独出土しているだけでその内容はもう一步判然としていなかった。地形もまたしかり。

地形においては、浄信寺川が後世の開削により今の位置に設置されたと聞いていた。それ故にこの周辺の微地形それ程古いものと考えていなかった。しかし調査の結果から判断すると現在の浄信寺川のある位置は旧来から凹地化していたことがうかがえる。調査地のⅠ区の北、Ⅰ区及びⅡ区の中央付近から地形の変換が認められ、これ以降北側は角度をもって傾斜する。遺構・遺物もこの地を境に激減する。現在の浄信寺川付近では無遺構・無遺物地帯になる。即ち、浄信寺川は旧来からあった河川跡の凹地を利用して掘削されたもので、この地ではなければならぬとの積極的理由からでなく、単に地形的要因によるところが大きかったと想像される。もっと推定することが許されるならば、ここは聖川の旧河川路で、これを利用して平安時代以前の後背湿地水田の悪水払いが行われていたかもしれない。しかし時期不明の遺構の項で述べた大溝址の存在とを考え合わせると、この大溝が掘られた時期にはこの凹地はほとんど埋没してしまい平坦化していた可能性が強い。今のところ塩崎遺跡群内で地形及び遺構・遺物の発見に空間が認められるのはこの地点だけである。

縄文時代晩期末葉に位置する米式の浅鉢片が1点検出されていることに注目される。それは該期の土器片が塩崎遺跡群内から散発的に出土したことは前記したところであり、どれも破片の磨耗が著しいとの記述がない。千曲川の洪水よりもたらされたものとは考えにくく、縄文時代晩期の終末頃には既に生活域を形成していたものと考えたい。ただ弥生時代層の下部に存在するのか、同時代面に展開するのか、現在までの調査所見から明らかにできないのは残念である。

弥生時代の遺構・遺物は数量とも少なかったが、遺物において注意を要するものがある。今まで吉田式・箱清水式は明瞭とはいかぬまでも大別は可能であった。しかし今回検出したものは、吉田式の要素を引き継いだ壺と甕があれば、単品で見ると限り箱清水式と認定される筈がある。これは両期の接点付近に編年されるべき遺物と考えられなくもない。ただ両者が出土した遺構は2軒の住居址にとどまり、ほとんどが破片出土で、他の器種とのセット関係を把握するまでに至っていない。今後の調査に期待しよう。

古墳時代の遺構・遺物は、今回の調査からは何も見い出せなかった。遺跡群内の過去の調査例では、確実にそれも爆発的展開を示していたのに、その範囲は調査地にも及んでいない。いかなる理由があったのであろうか。調査からは何も引き出せない。浄信寺川の凹地に聖川が暴れまくっていたのであろうか。何とも不思議な現象である。

奈良時代の遺構・遺物は数量とも少ないものの確実に存在する。山崎遺跡での調査を見ないまま記述することは誤りを犯す恐れがなくもないが、塩崎小学校地点遺跡に核を有する集落の北端付近のものと考えられる。

平安時代に至ると遺構数・遺物量を増し、住居址は、地形変換点より南の平坦部(Ⅲ区)から展開するようになる。規模は2m代から5m代のもので様々あり、内容も一様でない。調査時にはカマドが完存するものはなく、全て破壊された状態での検出であった。遺物からみると、坏底部にみられる回転ヘラ削りと回転糸切り痕を残すものは同一遺構から出土している例が多く、須恵器の残存比率も高く、灰輪陶器がほとんど認められないことを考慮するならば、奈良時代に近い集落といえよう。そのため住居の移転の際カマド構築石材等は抜き去られたのであろう。このことは、出土土器には完形で残存するものが皆無に近いことも移転を裏付けている。もう一つ重要な遺構に20号土塀がある。四耳壺が直立した形状で検出され、人骨小片が確認され蔵骨器として利用されていた可能性が強く、四耳壺蔵骨器説を主張しているように思える。

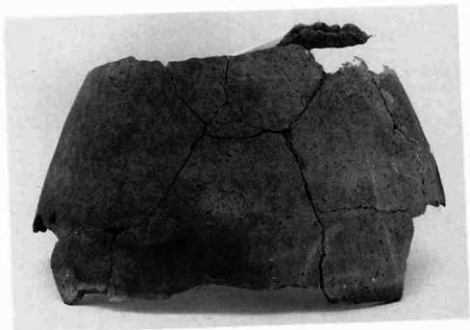
中世の遺構は、特徴的なカワラケや内耳土器の出土をもって該期のものと認定している。そのため2号溝址は、上面から内耳土器が集中的に認められ、底面より平安時代に比定される土師器坏が出土しているため、この溝本来の利用は平安時代に位置づく可能性がある。ともあれこの時代を代表するものに井戸址を上げることができ、塩崎遺跡群・鎌ノ井遺跡群・横田遺跡群の過去の調査でも検出されている。千曲川・聖川等水辺に近いのにこれ程の井戸が必要であったのか疑問を残す。表土除去の際、現存する井戸(Ⅲ区とⅡ区の接点付近)の撤去に立ち合うことができた。この時の所見では、現地表下2.6mで水面に達する。15号井戸址では検出面より2m近く掘り下げた所で、水溜ができて湧水面に達したことをうかがわせる。これらの井戸址は、基本形態を円形とし、直の素掘である。10号・18号には石が投げ込まれており、また16号には白褐色粘土ブロックが混入が覆土となり埋められた可能性が強いが他は自然堆積と思われる。余談であるが井戸を埋める際、梅と葦を投げ込むと良いとされる。埋め(梅)て良し(葦)ということらしい。

近世以降集落が形成され、地下の利用が著しく、何度も何度も井戸・貯蔵穴とおぼしきものが掘られている。そのいくつかは検出面に及んでいる。

以上、調査の結果を瞥見したが、小規模のそれもトレンチ(試掘坑)的な調査であったので、問題を残すところが多く、やり残した部分もあり、今後の調査を待ちたいところであるが、現在調査地の近隣は宅地が密集しており不可能に近い。この地にこの内容の遺構・遺物があったことを認識し、将来の調査を待って問題の解決にせまりたい。

図版 I

1号住居址壺
写真とは逆位で解
として使用されて
いた。



1号住居址小鉢



1号住居址高盤



3号住居址平



图版 2



《11》6号住居地坏



《9》9号住居地
高台付坏



《17》17号住居地
小形坏



图版 3



10号住居址
山形形袋
柄 Ⅱ
Ⅶ环

图版 4



(137)
19号住居址序



20号土城遗址



图版 5

梳齿面环



梳齿面环

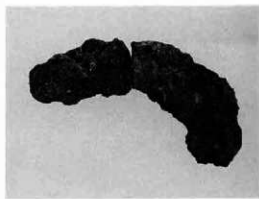


梳齿面环



齿16号土质
支脚彩土聚品

梳齿出面铁链

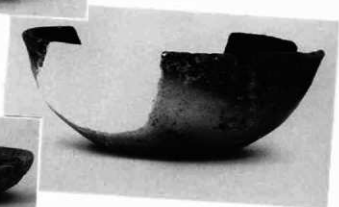


图版 6

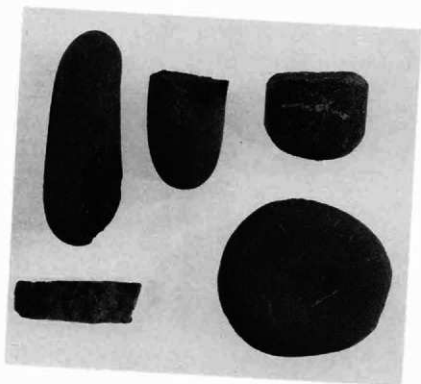


0210
2号基址出土
内耳土器

図版 7

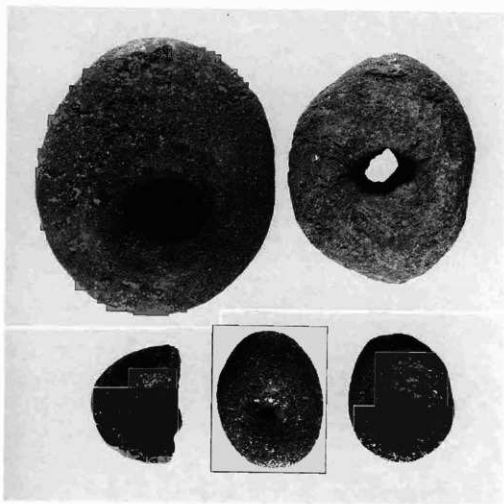


2号溝地
(出)高台付塚
群跡
(印)カワラテ



石器
(土)石打器
(土) " "
(土) " (大型蛤刃
石斧残欠)
(下)砥石
(下)石(15号土壌)

比倫2号土庫
右1



長野市の埋蔵文化財	第1集「信濃長原古墳群」
”	第2集「浅川西条」
”	第3集「中村遺跡群」
”	第4集「塩崎遺跡群」
”	第5集「塩崎遺跡群(2)」
”	第6集「三輪遺跡—付水内坐—元神社遺跡」
”	第7集「田中沖遺跡」
”	第8集「窪ノ井遺跡群」
”	第9集「四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)」
”	第10集「湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡」
”	第11集「箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡」
”	第12集「浅川扇状地遺跡群—半礼バイパスA・E地点遺跡—」
”	第13集「浅川扇状地遺跡群—迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構」
”	第14集「石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡」
”	第15集「箱清水遺跡(2)」
”	第16集「石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)」
”	第17集「浅川扇状地遺跡群—半礼バイパスB・C・D地点遺跡—」
”	第18集「塩崎遺跡群IV—市道松筋—小田井神社地点遺跡—」
”	第19集「土口將軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—」
”	第20集「三輪遺跡(2)」
”	第21集「芥田小学校遺跡」
”	第22集「吉田高校グランド遺跡」
”	第23集「横田遺跡群 富士宮遺跡」

長野市埋蔵文化財第24集

塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡

—角間地区市道路改良事業地点—

昭和62年8月25日印刷

昭和62年9月30日発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市遺跡調査会

印刷 ほおずき書務園